〔小右記〕三月十八日、壬午、石清水臨時祭、依有所慎、不參入、或云、左大將公季卿、於陽明門下脫衣、被右兵衞佐成房僕從副馬者也、云々、不聞也、左右丞相（道長、顯光）已下被參入云々、

試樂

〔小右記目錄〕四臨時祭　石清水　同三年（長德）三月十六日、臨時祭試樂事、

〔石清水文書〕五田中家文書附錄　宮寺緣事抄臨時祭下

同（一條）三年（長德）三月十八日、壬午、石清水宮臨時祭也、〇下略

東三條院、清水寺ニ御參詣アラセラル、

御修法ヲ行ハセラル

〔小右記〕三月十八日、壬午、〇中略今夜、女院令參清水寺、於彼寺可有御修法云々、寺（興福寺）家上下嗟歎云、（々脫カ）

十九日、癸未、皇后宮、御落飾アラセラル、

后位ヲ停メ給ハズ

〔日本紀略〕一院　三月十九日、癸未、皇后宮、昨日酉刻御出家、預其事者、大僧都覺慶、大僧都觀修、阿闍梨慶祚、阿闍梨證空也、在俗御裝束捨訖、又者（有カ）別布施云々、良久候宮、相遇女房、合（含カ）旨云、心神不宜、不相逢者、晩頭罷出、

〔小右記〕三月廿日、甲申、余（實資）參皇后宮、

〔一代要記〕一條院後宮　皇太后藤遵子　長德四（三）年三月十九日出家、不停后位、

〔今昔物語〕十九　三條太皇大后宮出家語第十八

今昔、三條ノ太皇大后宮ト申スハ、三條ノ關白太（頼忠）政大臣ト申ケル人ノ御娘也、圓融院ノ天皇ノ御代ニ、后ニ立セ給テ、微妙ク時メキ御マシケル間ニ、自然ラ年月ヲ積テ、老ニ臨ミ給ヒヌレハ、出家セントト思シテ、故ニ多武ノ峯ニ籠リ居ル增賀聖人ヲ以テ、御髮ヲ令挾ムト被仰テ、態ト召ニ遣シタレハ、御使多武ノ峯ニ行テ、此ノ仰セヲ告ケルニ、聖人糸貴キ事也、增賀コソ尼ニハ成シ奉ラメ、他人ハ誰カ成シ奉ラム云ヘハ、弟子共此レヲ聞テ、此ノ御使ヲハ、嗔テ打テムストト思ツルニ、不思サルニ外ニ、此ク和カニ參ラムト有ル希有ノ事也トソ云ヒケカクテ三條ノ宮ニ參テ、參レル由ヲ令申ム、宮喜ハセ給ヒテ、今日吉日也トテ、御出家有リ、上達部少々、可然キ僧ナト多ク參リ合タリ、內ヨリ御使有リ、此ノ聖人ヲ見レハ、目ハ怖シ氣ニテ貴ト乍煩ハシ氣ニソ有ケル、□コソハ人ニハ恐レラレケレト、見ル人々思ヒケリ、御前ニ召シ出ラレテ、御几帳ノ許近ク參テ、出家ノ作法シテ、□長キ御髮ヲ搔出テ、此ノ聖人ヲ以テ、令挾メ給フ間、簾ノ內ノ女房□テ泣事糸□シ、挾リ（ミ）畢奉テ、聖人居去カントテ爲ル時ニ、聖人音ヲ高クシテ云ク、增賀ヲシモ召テ、カク令挾メ給フハ何ナル事ソ、更ニ不心得侍ス、若シ亂リ

增賀ヲ戒メ師ニ請ジ給フ

增賀祇候ス

增賀ノ狂態

穢キ物ノ大ナル事ヲ聞シ食タルニヤ、現ニ人ヨリ大キニ侍シカトモ、今ハ練絹ノ樣ニ亂亂ト罷成ニタル物ヲ、若キ上ハケシウハ侍ラサリシ物ヲ、糸口惜ト云フ音、極テ高シ、簾ノ内近ク候フ女房達、奇異ニ目口ハタカリテ思ユル事无限シ、宮ノ御心ニハ更也、貴サモ皆失セテ、希有奇特ニ思シ召ス、簾ノ外ニ被候ル僧俗ハ、齒ヨリ汗出テ、我レモニ非ヌ心地共シテ居タルナヘシ、聖人罷出テムトテ、大夫ノ前ニ袖打合テ居テ云ク、年罷リ老テ、風重リテ、今ハ只利病ヲノミ仕レハ、參ルニ不能ス候ヒツレトモ、態ト思シ食ス樣有テ召シ候ヘハ、相構ヘテ參リ候ヒツレト、難堪ク候ヘハ、忿キ罷リ出候フ也トテ出ツルニ、西ノ對ノ南ノ放出ノ簀子ニ築居テ、尻ヲ搔上ケ、椽ノ水ヲ出スカ如ク晞ク散ス、其ノ音極テ穢シ、御前マテ聞ユ、若キ殿上人侍ナト、此レヲ見咲ヒ喧ル事ト无限シ、聖人出ヌレハ、長ナル僧俗ハ、カヽル物狂ヲ召タル事ヲソ極テ謗リ申ケレトモ、甲斐无クテ止ニケリ、宮ハ、出家ノ後、懇ニ行ヲソ御ケル、〇下略、宇治拾遺物語同ジ、

二十一日、乙酉、御厨子所及ビ内膳司ニ於テ、祓ヲ行ハシメ、内膳司御竈神ノ平野ノ社殿ヲ造立セシム、

〔中右記〕寛治八年十一月十一日、

宮主兼信祓ヲ奉仕ス

御竈神ノ祟

三所ノ御竈神

平野ノ御竈神社殿ナシ

修理職官人ニ造立ノコトヲ

仰ス晴明等ヲシテ造立ノ日時ヲ勘申セシム

（廣書）御竈神事

長德三年三月廿一日藏人信經私記云、今日雨降、又遣召宮主令奉御祓、（御厨子所、内膳司、）仰詞云、陰陽寮依例奉仕葵御祭、而月來之間、奉仕之勤不如法也、此由所不知食也、爰日者、御膳非例、仍令占申之處、御竈神主祟之奉致者、此由可祓申者、兼信奉宣旨、向彼司奉仕御禊、還參令奏聞云々、内膳司御竈神三所也、一所平野、件葵御祭奉仕之神也、一所庭火、是尋常御飯奉仕之神也、一所忌火之神也、是則十二月新嘗祭、六月神今食祭奉仕之神也、而葵御祭不如法之由、欲祓申之處、件平野神無所在、仍召問司官人、申云、件神圓融院御時、爲人所盜取、（依件神事、□□朝臣被除簡云々、）奉改以後、納置内膳御戸宅内、是有事危之上、依無神殿也者、因之月來於庭火神御前奉仕件葵御祭云々、是尤乖舊規、則奏聞事由、宣旨云、隨兼信所申之旨、如舊跡可令奉仕者、仍召修理職官人等、仰造立神殿之由、又召陰陽師晴明、光榮等、令勘申可立神殿之日時了、昨日依左大臣（道長）仰、召宮主兼信、奉仕御祓、（御厨子所、）

二十五日、己丑、東三條院ノ御惱ニ依リテ、大赦ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　三月廿五日、己丑、詔大赦天下、常赦所不免者、咸赦除之、依

大江昌言詔ヲ草ス

東三條院（詮子）不豫也、少内記大江昌言草詔、

廿六日、庚寅、○中略今日大赦、依東三條院御惱也、

〔小右記目錄〕二十御惱事　長德三年三月廿三日、女御止（宛カ）院御惱事、

非常赦

三月廿五日、依女院御惱、被行非常赦事、

〔京都帝國大學所藏文書〕狩野亨吉氏蒐集文書十二　御祈赦

同（長德）三三廿五非常赦、同○依母儀御惱、御祈、

詔書

詔書云、

詔ー大辟以下ー八虐、强竊二盜、常赦可不免者、咸赦除也、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　長德三年丁酉三月廿五日、依東三條院御惱、天下大赦、○百練抄同ジ、

○大宰權帥藤原伊周及ビ出雲權守同隆家ヲ赦スコト、四月五日ノ條ニ見ユ、

二十六日、庚寅、季御讀經、

〔小右記目錄〕四季御讀經事　同（長德）三年三月廿六日、季御讀經始事、

結願

同廿九日、御讀經結願事、

盜上總權介季雅宅ニ入ル

强盜、備後守源致遠（憲）ノ第ニ入ル、

〔日本紀略〕一條院　三月廿六日、庚寅、今夜備後守致遠宅强盜入來、搜取財物、

廿七日、辛卯、今夜上總權介季雅宅盜取雜物、

○盜賊、上總權介季雅ノ第ニ入ルコト、便宜合敍ス、

見參

官符

四月 大盡 甲午朔

一日、甲午、旬平座、是日、參議藤原朝經ヲ次侍從ニ補ス、

〔日本紀略〕一條院　四月一日甲午、平座、見參、

〔康富記〕文安四年十月一日、庚申、中略○旬、平座也、中略○長德三四一、見參給少納言、祿法給外記、中略○下

〔公卿補任〕七長和四年　參議正四位下藤朝經　四月一日補次侍從、

三日、丙申、平野祭、贈皇太后懷子國忌、

〔日本紀略〕一條院　四月三日、丙申、平野祭、仍國忌附寺家、

〔小右記〕四月五日、丙申、國忌、平野祭共行云々、

四日、丁酉、廣瀨、龍田祭、梅宮祭、

〔日本紀略〕一條院　四月四日、丁酉、廣瀨、龍田祭、梅宮祭、

五日、戊戌、大宰權帥藤原伊周、出雲權守同隆家ノ罪科ヲ赦シ、之ヲ召還ス、

〔公卿補任〕六長德二年　丙大臣正三位藤伊周　同三年三月廿三日、給官符召返、中納言從三位藤隆家　四年五四歸京、

非常赦ノ潤恩

隆家入京ス

〔日本紀略〕一條院　四月某日、太宰權帥伊周、出雲權守隆家被召返之、

〔小右記〕四月五日、戊戌、左大臣依喚參上御所、頃也復陣、仰諸卿云、太宰前帥、出雲權守藤原朝臣、可霑去月廿五日恩詔乎否、不可召上歟、雖潤恩詔、可在本所歟、其間定申者、右大臣、左衞門督、宰相中將定申云、件兩人罪潤恩詔歟、但並召上事、所被下勘明法家也者、左大將、民部卿申云、罪可霑恩詔、於召上事、可被尋先例也、余平中納言、右衞門督、勘解由長官申云、罪可潤恩詔、依免犯八虐之文、但至于召上事、只在勅定、左右難定申、左大辨申云、罪可潤恩赦、又乍潤恩詔、猶在本處者、余竊思惟、法條之所指、已以分明、然而不可敢申、左大臣定申旨不慥聞、左大臣以各申旨銘心、超座參上御所、良々還著便座、示諸卿云、前之非常大赦之時、如此之流人、殊有所思食、有召上之例、何剋罪潤赦令、在可召上者、左大臣召大外記致時朝臣、令勘申召流人使々例、諸卿秉燭後退出、

廿二日、乙卯、○略中去夜出雲權守隆家入京云々、使內舍人相副、先日或云、不差別使云々、然而彼日聞之、尙遣內舍人者、

〔榮華物語〕五　つくしにきゝ給て、あさましうれしうて、ものにそあたらせたまふ、わかうらゝ〔伊周〕のわかれ　○上略、皇子敦康ノ七日御產養ノコトニカヽル、かくいふほとに、

伊周皇子御誕生ヲ聞キ召還ヲ期待ス

ほとけの御とくに、われらもめされぬへかめりと、いみしくうれしく覺しめされて、此御ことの後は、たゝ行末のあらましことのみ覺しつゝけられて、御心のうちには、いとなたのもしくおほさるへし、かゝる程に、いまみや（敦康）の御事のいたはしけれは、いとやむことなくおほさるゝまゝに、いかていまはこの御事のしるしに、たひの人をとのみおほしめして、つねに女院（詮子）とう（一條）への御前とかたらひ聞えさせ給て、とのに（道長）もかやうにまねひきこえさせ給へは、けに御子の御しるし侍らんこそはよからめ、いまはめしにつかはさせ給へかしなとそうし給へは、うへ（一條）いみしううれしうおほしめしなから、さはさるへきやうにともかくもと、のとやかにおほせらる、四月にそ、いまはめしかへすよしの宣旨くたりける、（略中）されと此めしかへしの宣旨くたりぬれは、みや（定子）のおまへ、よにうれしきことにおほさるへし、夜をひるになして、おほやけの御使をもしらす、まつ宮の御つかひともまいる、これにつけても、若宮の御とくとよの人めてのゝしる、京には、かものまつりなにくれの事ともすきて、つこもりになりぬ、つくしには、御つかひも宣旨もいまたまいらぬに、たしまにはいとちかけれは、御むかへにさるへき人人、

道長ノ奏請

召還ノ宣旨

宮ノ御使下ル

かすもしらすまいりこみたり、それもいてや面目ある事にもあらねと、いと〳〵うれしくおほさる、さてのほらせ給、五月三四日の程にそ、京につき給へる、（隆家）兼資の朝臣の家に中納言のほり給へれと、大殿（道長）の源中將（敦康）おはすとて、このとのゝおはしたるを、てゝはゝさらによからぬことに思て、いみしうしのひてそおはしける、大殿の源中將と聞ゆるは、（略中）このかねすけかむこにておはしけり、されはこの中納言には、いまひとりのむすめに、おやにもしられてかよひ給けるか、かゝる事さへいてきて、いとゝうたてけにおやともさへいひけれは、いまに忍ひたまふ也けり、（略中）五月五日、中納言殿の給ひける、

おもひきやわかれしほとのそのころよ都のけふにあはんものとは

とありけれは、女君（兼資女）、

うきねのみたもとにかけしあやめ草ひきたかへたるけふそうれしき

中納言殿、宮（定子）にまいり給へれは、まつ御よろこひの涙とも、せきとゝめかたし、あはれにてかなしきに、姫宮（脩子）、わか（敦康）みやさま〳〵にうつくしうおはしますみたてまつり給につけても、夢のうつゝになりたるこゝちせさせ給ふ

隆家京ニ著キ兼資ノ家ニ入ル

隆家兼資ノ女ニ通フ

隆家ト兼資ノ女トノ贈答歌

隆家中宮ニ參ル

明順筑紫ニ下向ス

事、かきりなし、いつしかつくしのとのゝ御事をおぼさる、御むかへに明順（高階）
朝臣なと人々まいりにけり、淑景舍（原子）宮（敦道親王）のうへなとあつまらせ給へり、四の
御かたは、いま宮（敦康）の御うしろみとりわききこえさせたまへれは、あつかひ
きこえさせ給ふ、中納言殿、よるはかりこそをんな君のもとへおはすれ、だ
た宮にのみおはす、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　四月五日、有勅、召返太宰權帥伊周幷出雲權守隆
家、五月十三日入京、

〔百練抄〕四一條天皇　四月五日、前帥、出雲權守等可召返之由宣下、去月廿五
日、依東三條院御惱、非常赦、可潤恩詔哉否、令諸卿定申、遂有恩免也、

〔吉口傳〕○伯爵柳原義光氏所藏　伊周公流刑事
伊周公、爲朝敵雖被配流、自路次被召返之、

〔勘仲記〕正應五年九月七日、
官例女院御不豫時、爲公家御沙汰、被行御祈例、
一條院（長德三年）同四月五日、被召返流人○此間闕アリ、同隆家等、

實資加署

○隆家入京ノコト、便宜合敍ス、伊周及ビ隆家、從者ヲシテ、花山法皇ヲ
御在所ニ射奉ラシムルコト、二年正月十六日ノ條ニ、伊周及ビ隆家ノ
罪名ヲ勘申セシムルコト、同年二月十一日ノ條ニ、伊周ヲ貶シテ、大宰
權帥ト爲シ、隆家ヲ出雲權守ト爲スコト、同年四月二十四日ノ條ニ、伊
周ヲ播磨ニ、隆家ヲ但馬ニ置クコト、同年五月十五日ノ條ニ、隆家、入京
ヲ請フコト、同年十月七日ノ條ニ、伊周、密カニ入京シ、次デ本府ニ追ハ
ルヽコト、同年十月十日ノ條ニ、伊周著京ノコト、本年十二月是月ノ條
ニ見ユ、

太皇太后宮權大夫藤原佐理ニ朝參ヲ許ス、

〔日本紀略〕一條院　四月五日、戊戌、太皇大后宮權大夫藤原佐理可許朝參
○佐理ノ罪科ヲ議スルコト、元年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

七日、庚子、擬階奏、

〔日本紀略〕一條院　四月七日、庚子、擬階奏、

〔小右記〕四月五日（三）、丙申、○中略外記史生持來擬階奏、加署返給畢、

八日、辛丑、大神祭使發遣ニ依リテ、灌佛ヲ停ム、

〔日本紀略〕一院　四月八日、辛丑、停灌佛、依大神祭也、

〔年中行事祕抄〕四月八日灌佛事　當遠社祭使立日止例

長德三年四月八日、辛丑、大神祭使立、乃止灌佛、○年中行事抄同ジ、

十六日、己酉、賀茂祭、是日、花山法皇ノ供奉人濫行ス、尋デ、花山院ヲ圍ミ、其下手人ヲ追捕ス、

〔日本紀略〕一院　四月十三日、丙午、御禊、

十四日、丁未、警固、

十六日、己酉、賀茂祭、

十七日、庚戌、解陣、

〔小右記〕四月十六日、己酉、右衛門督示送云、宰相中將同車、自左府退出之間、華山院近衛面人數十人、具兵仗出來、乍令持榻、捕籠牛童、又雜人等走來飛礫、其間濫行不可云者、驚奇無極、

十七日、庚戌、修理大夫同車、爲見物向智足院邊、華山法皇御其邊、未及見物、中間還御、未知其由、左府又座彼邊、仍余進左府見物處、並車見之、宰相中將、勘解由長官在左府車、左府被示花山院濫吹之事、或云、件事自左府被奏聞、有可追捕院又々佐召遣在神館之使官人等之間、側有漏聞、法皇懸車還御云々、見物畢歸家、東帯詣祭使源大納言、民部卿平中納言、大藏卿修理大夫、右衛門督、左大辨、右大辨、宰相中將、勘解由長官、雲上人々來會、有蹴鞠、又羞小食、或者云、撿非違使等、依勅圍華山院、申去夕濫行下手人云々、此間難得慥跪、奉爲院太無面目、積惡之奉致也云々、或云、下手人等、若遂不合出給、可搜撿院內之由、有綸旨、此事左衛門尉則光、撿非違使、又彼院御乳母子也、通彼院云々、嗷々說不可記、轉聞、祭使少將神館宿所、藏人頭二人、及電上人々七八人來訪、脫衣被近衛府官人已下云々、藏人頭向此處、往古不聞之事也、末代之事、太輕忽々々、

十八日、辛亥、公誠朝臣幷下手者四人、去夜自華山院被撿非違使奏聞事由、至公誠朝臣令候、又々可追捕者、

〔大鏡〕中太政大臣伊尹謙德公略　○上略　さてまた花山院のひとゝせまつりかへさ、御らんせし御ありさまは、たれも見奉りけんな、まへの日、こと出させ給へりしひのことそかし、さることあらん時、けふは猶御ありきなとなくてもあるへきに、いみしき命のものとも高帽賴勢をはしめとして、御車の

御禊

警固

解陣

院人公任齊信等ニ濫行ス

道長ノ奏聞ニ依リテ追捕セシム

法皇還御

檢非違使花山院ヲ圍ム實資ノ感慨

院下手人ヲ出サル

高帽ノ賴勢

異樣ノ御數珠

しりにおほくうちむれまいりし氣色とも、いへはをろかなり、何よりも御すゝのいとけうありしなり、ちいさき柑子を大かたのたまにはつらぬかせ給ひて、達磨には大柑子をしたる御すゝいとなかく、御さしぬきにくしていたさせ給へり、さる物やは候し、人々むらさいの〻(にて)御車にめをつけ奉りたりしに、撿非違使まいりて、きのふのことといたしたりしわらはへ、とらふへしといふこと出きにける物か、このころの權(行成)大納言殿、またそのおりはわかくおはしまし〻程そかし、人はしらせて、かう〳〵の事候、とくかへらせ給ひねと申させ給へりしかは、そこらに候つる物とも、くものすを風の吹はらふかことくにけぬれは、たゝ御車そひのかきりにてやらせて、物見車のうしろのかたよりおはしまし〻こそ、さすかにいとおしくかたしけなく覺えおはしまし〻か、さて撿非違使つきやいといみしうからうせめられ給て、太上天皇の御名はなかくくたさせ給てき、かゝれはこそ民部卿殿の御いひことは、けにと覺えれ、

行成還御ヲ促シ奉ル

〔大鏡裏書〕花山院御覽賀茂祭事

公任齊信ノ愁申

或人記云、(經記)前一條院御時、賀茂祭日、四條大納言(公任)與別當參議齊信(懐忠)民部卿、

道長懐忠ヲシテ追捕ノコトヲ奏セシム

宰相中將、同車見物、而花山院令打給、仍共參內、令愁申、次日、入道殿(左大臣)於紫野見物給、花山院同坐紫野殿、召故民部卿(懐忠)、(道方職事)被仰云、只今參內可申也、院坐紫野、於此處欲令彈行者、戸部承仰、小許步去、又歸被申云、宣下若被下者、上卿可奉歟、其時故源戸部(俊賢)、候殿御車後、申云、如此事、以內侍宣、可被下歟者、御堂令許諾給、仍故戸部被參內之間、行成大納言(宰相時歟)、被逢雲林院南大門邊、被問云、坐何事哉、答云、依殿御使參內也、重被問云、何事哉、被答云、難申事也者、行成得其心、使人申院、早可令歸給者、院逐電歸給了、其後民部卿歸參、被申云、聞食了、早可被行者、然而既令歸給了、不能被彈云々、

行成院ニ告ゲ奉ル

〔百練抄〕(一條天皇)四月十七日、撿非違使等、依勅園華山院、責申去夕濫行下手人、是右衞門督公任、宰相中將齊信同車、自左府出之間、於路次、花山院人數十人、致濫行之故也、

行成懐忠ニ會フ

〔古事談〕(王道后宮)入道(道長)殿賀茂祭見物棧敷間、俄花山院鬪亂事アリ、以職事被仰遣撿非違使由、奏者申云、上卿誰人哉、仰云、如此急速大事、只稱內侍宣也云々、此度院被惜下手人、入道殿仰使廳ノ下部、昇院築垣上、院恐之、被出下手人云々、

院下手人ヲ出スヲ惜ミ給フ

十九日、壬子、吉田祭、

〔日本紀略〕一條院　四月十九日、壬子、吉田祭、

二十二日、乙卯、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　四月廿二日、乙卯、發遣奉幣使、

〔小右記〕四月廿二日、乙卯、勘（檢實）解由長官云、今日奉幣使、伊勢及諸社、自八省被出立者、即以勘解由長官、爲伊勢使、風聞、是先年御願云々、社數使等、且所注也、

先年ノ御願ニ依ル

右（顯光）大臣承行云々、

〔伊勢公卿勅使雜例〕一條二度

公卿勅使

長德三年四月廿一日、乙卯、（伊勢、石清水、加茂、平野、春日四社、皆公卿使、）

參議源俊明（賢）、〇下略

二十四日、丁巳、强盜、中納言平惟仲ノ第及ビ閑院右少辨朝經ノ曹司ニ入ル、

〔日本紀略〕一條院　四月廿四日、丁巳、今夜强盜卅餘人、入中（禮脫カ）納言惟（手）仲家、廿五日、戊午、强盜入同（閑院）院右少辨曹司、

〔小右記〕四月廿五日、戊午、去夜群盜入平中納言家及閑院、以書狀、送納言及右少辨朝經朝臣、入平納言家之强盜、先入彼家西對及堂等、欲入寢屋之間、人人相戰、仍不入臥內云々、太不便事也、朝經朝臣來云、入閑院之强盜、取女房衣裳等、退去之後、僅聞其由、執續松者二人走入、捕女等剝取衣裳、不到老堂寢所、近日强盜不憚貴處、可謂末代、

二十五日、戊午、御惱ニ依リテ、十社奉幣使發遣ノコトヲ定ム、

〔小右記〕四月廿五日、戊午、〇中略參山（內カ）之、御惱頗宜者、令勘申爲御祈可被定十社使之日、件勘文、亮業方朝臣持來、使等同定仰、

是月、慈覺、智證兩門ノ碩學ヲシテ、宋僧源淸贈ル所ノ五部ノ新書ヲ議セシム、

〔元亨釋書〕二十五永延皇帝　資治表六　（長德三）十有一年、夏四月、議宋國新書、

〔元亨釋書〕四慧解二之三　釋勸（觀）修　長德三年四月、宋國送新書五部、彼土台徒之述也、所謂法華示珠指二卷、龍女成佛義一卷、十六觀經記二卷、佛國莊嚴論一卷、心印銘一卷、附而乞台敎遺失書六部、此方學者、有議新書者、因玆朝廷詔慈覺、智證兩徒加毀破、法花示珠指上實因破之、下修預焉、〇寺門傳記同ジ、釋慶祚　長德三年四月、宋國送新書五部、其文膚淺、朝廷勅慈覺、智證兩家質破、其內龍女成佛義一卷、祚預焉、

日時ト使

觀修

實因

慶祚其文膚淺

〔天台霞標〕初編之四　東陽覺慶和尚　議宋國新書　妙玄私記卷七、曰、昔大宋源清師自作書、並同朋鴻羽所造佛國論等、送之本邦、慧心檀那等、各難一卷、其鴻羽論云、千華葉勝應、是方便土也云々、靜照法橋難之、　靜照

〔大唐國法華宗章疏目錄〕人師章疏

法華示珠指二卷　上卷實因破之、下卷觀修破之、　源清述、

龍女成佛義一卷　慶祚破之、　同　源信

十六觀經記二卷　上卷心破之、（悪脫力）下卷且那破之、　同　安慶聖救

佛國莊嚴論一卷　靜照破、（之脫力）　鴻羽抄出、

心印銘一章　安慶、聖救共破之、　慶昭作、　覺運

〔蓮門類聚經籍錄〕上　觀經疏釋類　奉先源清

顯要記二卷　東域曰、別記二卷、是歟、　慧心院源信　檀那院覺運

破顯要記二卷

〔淨土依憑經論章疏目錄〕（眼繁書寫）第三　釋經錄　源清　唐人、天台宗、

同經疏顯要記二卷　五十丁、　上卷源信　下卷覺運

同破顯要記二卷

源信ノ顯要記破文　無量壽阿彌陀兩經前後ノ說　五無間ノ說　覺ノ說

〔觀無量壽經疏顯要記破文〕上　天台山首楞嚴院沙門　源信

案、大宋國清和尚、無量壽經疏顯要記上卷云、大本兩卷、名無量壽經、此經最先說也、小本一卷、名阿彌陀經、卽前本後說也、已上、今謂、何以知前後耶、有與法師、雖作解釋、義猶未了、凡非明證、難定判矣、記引四十八願中第三、第三十一、第三十二願已、注云、此第二、第三十、第三十一願也云云、恐是文誤、下去不能具出、疏明理卽佛云、雖五無間、皆生解脫想、

記云、五無間者、一報無間、二受苦無間、乃至五形無間、已上、今謂、疏意、應以三道卽三德也、衆生界是苦道、五無間是業道、昏盲倒惑是煩惱道、又此之文相、順淨名意、如弟子品云不壞於身、而隨一相、不滅癡愛、起於明脫、（此下一本、以五逆相、而得解脫ノ八字）アリ、不思議品云、乃至無間罪、猶能發意、生於佛法、已上、是故、須指大小乘所說無間業、以卽解脫德、何但出異熟果五義耶、

記云、問、過去諸佛、本必俱迷、若本不迷、則有自然之佛、與衆生異、若本俱迷、誰示令覺、若自覺者、衆生同有覺性、何不自覺、若迷有厚薄、一等俱迷、何厚薄乎、又俱迷之前、佛界應闕、俱覺之後、九界應無、答、譬如群盲俱行險道、一盲忽明、見坦夷

路、導彼盲者、令達正道、其不肯者、墮重險中、誰之過失矣、然不可推求最初之佛、則墮無窮之過、且衆生恒處迷中、本自不覺、由無始顚倒、妄念相續、沈淪無已、雖在沈淪、本覺性淨、雖覺有前後、覺已無殊、設一佛未覺之前、群迷俱覺之後、是十界法、法性宛然、已上、此意、同法華記內薰自悟學者云云、不同不能繁出、今之解釋、其意如何、欲聞安肯一盲忽明之譬、翻招前難、同有理性、同無教法、等無厚薄、有何別緣、又先悟乎、又云、不可推求最初之佛、則墮無窮之過云云、此文難測、爲許無教自悟佛、爲不許耶、若不許○此下一本、者、墮無窮過展轉、禀教則無窮故、若許者ノ十六字アリ、其難如上、墮無因過、無教自悟、卽無因故、況復以此應爲最初、何言不可推求最初、則墮無窮過耶、又云、設一佛未覺等云云、此中既置設言、上來問答、卽爲假設、未理盡之釋、

本性ノ說

記云、或云、本性凝然淸淨、因最初一念妄起、由是背覺合塵、故有一切色心等法者、今謂、此說符於不了義教、今師同冥初生覺之見也、已上、今謂、仁王經云、衆生識初一念、識異木石、生得善、生得惡、乃至初一念、金剛終一念、於中生不可說識、成衆生色心、是衆生根本、有三卷私記世傳、

本際ノ說

章安記云、問、諸衆生等、有本際不、若言有者、何故中阿含、衆生本際、不可得知、答、略爲二說、理中不可說煩惱與身有前後、二不說卽有、一念識空也、已上、近代學者、由此異論、或言、有始起衆生、同化地部義、若不爾者、一切諸佛、一々教化無量衆生、永出三界、若無始起者、衆生速應盡、卽違聖說衆生無盡、或言、無始起衆生、若云爾者、六道衆生、由業受生、若有始起者、彼先無業因、於六趣中、受何處報、若言初時不由業生、唯約後時論業報者、不齊之過、何以得避、況復聖說生死無始耶、有約理性釋之、亦終不脫凝滯、願示正義、

眞如ノ性ノ說

記云、眞如之性、本來不覺、謂之本迷、覺無別覺、只覺不覺、已上、今謂、眞如本來、離諸迷謬、如起信論云、從本已來、無虛妄念、性自滿足一切功德、有大智慧光明義、遍照法界義、眞實識知義、法界一相、卽是如來平等法身、依此法身、說名本覺、已上、取意、故設名不覺、不可名本迷、

法報應三身ノ說

記云、色身應也、法門報也、實相法也、可對空假中、應身卽假、又一々身無作、卽空中、皆法界故、已上、此中應云報身卽空、法身卽中、恐是二句落歟、不俟說知文猶未具、

正報動依報動ノ說

記云、大樹緊那羅王、住世尊前、以瑠璃琴、善自調品、時大千界所有山林、皆悉踊沒、是會大衆、唯除不退菩薩、餘皆起舞、天冠菩薩、語大迦葉云、云何各捨威儀、如

彼小兒、擧身動舞、汝觀不退菩薩威德勢力、琴不能動、誰見如是、不敬無上正眞菩薩、豈非彼經以圓斥偏、正以菩薩勝妙五欲、斥其同體、無明全在故不自安、見山涌沒（踊下同ジ）、同體之惑、全在依正、是致正報動、見依報動、（取意）今謂、大衆起舞、以爲正報動、山林涌沒、以爲依報動、此解妙之又妙、何者聲聞有執、理應動搖山林、無惑將何涌沒、自非此釋、詎通此疑、一朝之益、不悔夕死矣、

經體ノ說

疏釋經體云、無量功德、共莊嚴之、種々修行、亦歸趣之、言說問答、亦詮辨之、記云、體爲名等所依、名如前、宗用卽智斷二德、功德智德也、衆行斷德也、言說卽敎、（已上、此釋巧妙、誠契大師本懷而已、

四土淨穢ノ說

疏明四土各有淨穢云、實報者、次第頓悟、上下淨穢也、寂光者、分得究竟、上下淨穢耳、

報土寂光土淨土ノ說

記云、報土圓頓上、別次下、寂光土三賢十聖住果報、唯佛一人居淨土、卽上下也、略抄、今謂、疏三賢十聖住果報、爲報土證、今何以爲寂光土耶、若分得法報、分屬二土者、妙覺身土、理亦應爾、報身居報土、法身居寂光、何故身有法報、土唯寂光、是義雖問出宗疏、愚蒙未（マ）擊、今求其決、疏判敎云、此卽頓敎、

圓頓ノ說

記云、今經卽圓、判圓爲頓耳、（已上、言圓爲頓者、爲是純圓、爲帶權圓、帶者餘經亦應名頓、純者法華卽無差別、何況毘婆沙羅、得阿那含、既有小益、那云純圓、不爾、法華得法眼淨、判爲小果、亦應無失、若言毘婆沙羅、在別處者、既蒙佛光、增進集者、亦結爲一經、豈非此會得益耶、然心卽是佛、生身得忍、通在餘經、何獨純圓耶、

覺運ノ顯要記破文

〔觀無量壽經疏顯要記破文〕（下）

天台山東塔院沙門　覺運

分得大宋國奉先寺源和尙觀無量壽經疏顯要記下卷、文義備矣、理趣明矣、卷舒鑽仰、慕道欣義、今錄疑慮、重求幽玄而已、

三々昧ノ說

疏釋住云、聖三乘人、因卽三々昧也、記云、三々昧者、一有覺有觀、二無覺有觀、三無覺無觀、一々三昧、皆以空無相無作相應心、入諸禪故、（已上、問大論云、空無相無作、是三々昧名聖住、疏意依彼、今何以有覺有觀等、若云以空無相無作心、入諸禪故不違者、只應如本擧之、何煩轉釋耶、況復法花文句、以四禪爲梵住、若依今釋、聖梵兩住有相濫失、

請法ノ說

疏云、請佛文爲二、初明請人、次明請法、記云、言請法者、謂法則、卽求請之儀、如經雨淚等、故疏科爲請法身、（已上、今案、疏下文云、請法中有二意、章提見佛下、正明請其生處、今向世尊下、明請往生之因、（已上、驗知請法非是求請之法則矣、

五苦ノ說

疏云、五苦者、五道非樂、故云五苦、記云、五苦對五道者、卽彼五惡趣也、彼云往生安樂國、橫截五惡趣、今文復云五苦、苦字恐誤、合是惡字、已上、今謂、經云五苦、疏亦不改、何因云誤、況是惡趣、豈非苦耶、

法身ノ說

記釋法身云、又三身量等、無非法界、三佛並常、一々無改、是則體遍、智遍、應遍、故同是法界身、已上、此釋甚好雅、合宗旨、然應身遍法界、未了其意、何者、應身隨機在無那、忽周遍耶、

佛量ノ說

記云、經明觀音身量、其誤、疏雖不說、以佛身數驗之、可見、如疏定佛身只六十萬億等菩薩、却倍二十萬億耶、今以義定、只可云八萬億等、但除十字、不可除、或可除八字、則與佛身量、所較不多、已上、此解巧妙、符順疏意、然隨義除文、何以城避車耶、況復寶樹高八千由旬、寶座華葉二百五十由旬、與佛量、並不相稱、豈得一一加添削耶、

二乘ノ說

記問、若云彼無二乘者、如彼第十四願云、設我得佛、國中聲聞、有能計量乃至於百千劫、悉共計校知其數、不取正覺、何謂無二乘種耶、答、願中所明聲聞者、蓋攝三乘之行、於十萬佛土、皆使願生我國、其數不可校計、悉是大乘佛、生我國、其數不可校計、悉是大乘佛道聲聞、非於彼土發小種、何以得知、故大本云、佛語阿難、

逆罪ノ說

又彼聲聞菩薩、其數難量、不可稱說、神智洞達、威力自在、能於掌中、持一切世界、既云聲聞菩薩神智洞達等、豈非聲聞與菩薩、智力齊等、明知、但是大乘佛道聲聞也、驗彼實無小種、今謂、此經及大本、小阿彌陀經、寶積經等諸處、但說彼有聲聞、言不涉大、那忽判大乘聲聞耶、若云神智洞達故、是大乘者、亦不必然、彼土衆生神通无礙、豈況聲聞、无此堪能耶、

疏問、大本五逆謗法不得生、此經逆罪得生、釋有兩義、約人造罪有上有下、上者如世王、造逆必有每悔令罪消薄、容得生、下人造逆多无重悔、故不得生、大本約行、行有定散、觀佛三昧名定、脩餘善業、說以爲散、以善力微、不能滅除五逆、不得往生、大本就此、故言不生、此經明觀佛、故得生、記問、若云悔力及定力得生者、如下品但云臨終遇善知識教、令念佛、其爲苦逼、不遑觀念、知識復教、但稱彼佛之名十聲而已、何曾觀悔、與彼十念、應无有別、答、是義不然、今尋二經、文意稍別也、應如疏會、何者、彼經但云衆生志(至)心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除逆謗不生明知、彼但通論信樂欲生之心、若稱十念、皆生我國、故云除於逆謗、豈非不論觀悔、今經不爾、的指臨終之際、爲苦所逼、既見苦相、必必起大怖、願求救護、忽遇知識、(善說アラン)如云種々慰、爲說妙法、既云爲說妙法、必廣示彌陀本願、教

四記ノ說

發四弘、授與歸戒、或說心地法門、是人必能深信正性、何以得知、今推果驗因、如此此人生彼、華開得見觀音、爲其廣說實相、既云爲說實相、豈不由於宿種根利耶、又觀現當人、不能自悔、既遇知識、必爲廣懺積罪、是人定起仰賴之心、亦同自悔之義、況云志心稱念、令聲不絕、具足十念、設以不能觀想、既云稱念十聲不絕、必无間雜、還同定心、乃云、於念々中除八十億劫生死之罪、如斯十念、豈與彼同、良由彼无此等勝緣、雖云十念、不能除滅重罪、已上、今謂、彼經略故、但云十念、何言定無此等勝緣、又推果驗因、此亦未信、如求度人八萬劫中、雖无脩因、以燈燃時、久遠發心、爲緣脫、緣大小雖異、因果意同、何以觀音爲須實相、而驗臨終時根利耶、已上異本、此後解釋、甚有意趣、若專前釋、散善下根、永絕望矣、上品中生、疏云、現前受記者、四種受記一往現前也、記云四記者、劫國无生、已知未知也、云一往現前、卽直記當得菩提、故云一往、已上、今謂一往現前者、疏意、首楞嚴經有四種記、未發心、適發心、密記、現前也、今經現前授記一往、當彼經第四記也、何故出劫國等四、而言直記當得菩提、故一往等耶、

三明ノ說

記云、三明亦名三達、達三世也、且天眼耳他心也、更加爲六通耳、已上、問、通途天眼、宿住、漏盡爲三明、那忽云天眼耳他心耶、

決定不生ノ說

疏云釋論明實不生者、決定不生、此中明生、退菩提心得生、至彼處无漏道熟、卽證第四果、大論亦然、記云、決定不生者、卽此土四種聲聞也、一定性、二退菩提、三應化、四佛道、已上、問、法華論有四種聲聞、謂決定、上慢、退大應化也、今家更加佛道爲五、今何改上慢、加佛道爲四耶、

列文科釋簡略ノ意

〔法華龍女成佛權實疑難〕〇京都帝國大學所藏　天台山千手院沙門釋慶祚記

第一、列文科釋簡略意中云、獻珠科爲以一實除疑、成道文科、爲現成明證、已上、今勘文句初科云、第七、以一實除疑、是摠指一段、而未分經文、復云第七現成明證、復二、一者獻珠、二正示因圓果滿、驗知、獻珠成道二文、共在現成明證中矣、而何云獻珠爲一實除疑、成道爲現成明證耶、

義ニ約シテ文ヲ引クノ意

第二、約義引文、銷會意中、廣述能讚所讚二義、以釋明圓釋疑偈矣、初能讚、置而不論、且就所讚釋、經既無讚佛之言、疏只云持經得解、經疏如斯、何强作此釋耶、道暹和尙法華輔正記云、經深達罪福者、問、此是讚佛、爲自讚耶、答、觀經及疏、是讚自身所證、以釋智積之疑、已上、依此記文、彌知大師之旨、豈可得云方便品釋歎佛境智、已故至此偈、不更釋乎、又引玄文孤起部文、未必爲明據、何者成菩提事、既在龍女、故知稱歎於佛、豈非指自證耶、文云引胎經釋者、顯實證同也、已上、

徵釋シテ傍ラ疑滯ヲ通ズルノ意

今勘胎經、魔梵釋女成佛、並云衆相具足、豈非應身乎、故現成明證中、獨引此經、依應身同故也、而何偏云實證同而已耶、（利益段、從體起用等文意同、下章更不討覈、）第三、徵釋傍通疑滯意中、番々問答、其語雖巧、而論龍女體用之權、遂闕今家本迹之釋、仍引疏記、聊注管見、文句云、今怙文爲四、一列數、二所以、三引證、四示相、列數者、一因緣、二約敎、三本迹、四觀心、始從如是終于而去、皆以四意消文、而今略書或三二一、貴在得意、不繁筆墨、（已上、今案、始終皆以四意消文、又龍女文、何獨不用本迹釋耶、）此品記云、正示圓果中云、龍女作佛者、問爲不捨分段、卽成佛耶、若不卽身成佛、此龍女成佛、及胎經偈如何通耶、（問意可知、）答、（今案、答有二解、一自今龍女至從實得說、約權行答、二自若實得者、至爲權巧也、約實行答、）今龍女文、從權而說、以證圓經成佛速疾、（今案、正約權行答、）若實行不疾、權行徒引、是則權實義等、理不徒然、（今案、此寄權行以釋實行速疾道理、）偈從實得說、（今案、此顯偈意、令上道理兼通問也、）若實得者、從六根淨、得無生忍、應物所好、容起神變、現身成佛、及證圓經、既證無生、豈不能知本無捨受、何妨捨此往彼、（今案、此是約實凡答、）餘敎凡位、至此會中、進斷無明、亦復如是、凡如此例、必須權實不二、以釋疑妨、（如文可見、）言權巧者、不必一向唯作權釋、只云龍女已得無生、則約體用、而論權巧、非謂專約本迹爲權巧也、（今案、記師釋實行義、已爲會文句權巧之文、作釋也、驗知權巧之言、先須約本迹、豈引此文、偏證體用、不必之言、良有以哉、）故權實二義、經力俱成、佗人釋此文、或云七地十地等者、不能顯經力用故也、（今案、正結今家權實雙義、以斥佗人一向權釋、）輔正記云、又若一向從權釋者、卽深位菩薩、權引實行、示同卽成、亦應無失、（今案、本迹之釋、附文分別、今委悉述之、我朝古今學者、或好今解、餘文權實義、其要在茲、故以管見、實之釋未明、彼義幸有容許、是發衆之狀也、）文云、乃是如來於彼經中、說圓頓法、魔梵釋女獲聞自證、已上、問、胎經成佛、是引過去事也、而何今云乃是如來於彼經中等耶、（如此之文、須盡微問、且舉一端、不列諸餘、）

（注）餘見此龍女成佛義、著述之義、美冠絕當時、而才疎詞短、不能縷陳、爲決愚蒙、先記疑難、願以今日擊動之力、正爲佗生對揚之緣矣、于時長德五季正月五日、於石藏山大雲寺記、

愚蒙ヲ決スルタメニ疑難ヲ記ス

○源淸、新書ヲ贈リ佚書ヲ乞フコト、元年四月十六日ノ條、ニ見ユ、

五月小 甲子 朔盡

一日、甲子、日食、

〔日本紀略〕一條院　五月一日、甲子、日蝕、

〔本朝統曆〕七　五大小朔甲子、卯三、日蝕十分強、寅八、辰四、

十分強

五日、戊辰、僧慶勢、解文ヲ檢非違使別當藤原公任ノ政所ニ上リ、海賊犯人大友忠吉ノ誣告ニ依リテ、看督長ノ勘責スルヲ糺免セラレンコトヲ請フ、

忠吉贓物ヲ慶勢ノ所由錦吉ト稱スニ預ク

〔北山抄裏文書〕○公爵三條公輝氏所藏

前年ノ誣告

僧慶勢解申請非違別當(公任)殿政所裁事

請被依實裁糺免海賊大友忠吉之間日記、申出无實絹十二疋、縫衣十領、慶□(勢)之所由錦吉正許宿置之由差申、卽使左看督長秦常正强勘責□(事カ)、右慶勢謹檢案內、以去年十二月之比、○二年十二月十九日ノ條參看、件海賊忠吉、獄所候間、爲吉正□忿怨、所由慶勢之許、米一石五斗宿置之由差申、勘責如伐燒、爰□(象)勢依實注具由、愁申於檢非違使廳之日、被召問之處、件忠吉、既□(無カ)實之由申了、隨卽口問官人府生飛鳥戸正兼與判、外題云、盜□(忠)吉等勘問之處、宿置贓物之由、無差申事、仍免除已了、而間依去月大捨(赦)、被放免也、○三月二十五日ノ條參看、厥後不經

忠吉大赦ニ會フ

幾程、又仕海賊被追捕、□(歸カ)問之日、猶未忘彼本執忿怨、重物數多申出、隨卽使常正勘□(責カ)、不知爲方、何以忽辨申无實之物乎、愁吟之甚、莫過於斯、□(望)請蒙裁下、被免除急責、將知正理之責、仍請裁、以解、

後復捕ハルヲ再ビ無實ノ申出ヲ爲ス看督長慶勢ヲ急責ス

長德三年五月五日　　僧慶勢

八日、辛未、仁王會、

大祓

〔日本紀略〕一條院　五月五日、戊辰、於八省大祓、依仁王會也、

八日、辛未、仁王會、

鴨河ノ洪水

十一日、甲戌、藏人藤原廣業ヲ勅使トシテ、延曆寺ニ遣ス、

〔權記〕五月○此間闕文アリ、申(後)忠規朝臣參入之由、卽奏事由、仰云、去十一日、藏□(人)廣(藤原)業爲勅使登山、歸京之間、至鴨河、々水汎溢、爲令流迎馬、經廻河邊、于時小舍人、暫執放馬格、渡迎馬之程、此放馬口付、指東山走入、須臾帶弓箭騎馬者三人出來、彎弓馳向小舍人、廣業雖○此間闕文アリ、欲射落□、含其由可問、卽問忠規○此間闕文アリ、下手走二人○此間闕文アリ、事、雖從者之下手○此間闕文アリ、食不科責、至二人○此間闕文アリ、仰□由、亦給下手人、給左衞門尉則○以下闕文、

歸途狼藉ニ遭フ

○廣業ヲ延曆寺ニ遣ス所以、明カナラズ、

道長ノ饗饌

騎射

勅使

儀樂

御母綵子

十七日庚辰、右近ノ馬場ニ於テ、競馬ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　五月十七日、庚辰、於右近馬場、有競馬之事、諸卿參會、

〔小右記〕五月十五日(七)、庚辰、早旦詣左府(道長)、余依彼令(命カ)兩三上達部會合、巳刻許、主人向右近馬場、余(實資)合乘相府車、彈正(修理)親王(敦道)、帥親王(顯光)、右大臣(公季)、左大將(時中)、源大納言(懐忠)、民部卿(實資輔正)、式部大輔(左衛)、左衛門督(懐平)、修理大夫(左)、左兵衛督(公任)、左大辨(扶義)、右大辨(中輔)、宰相中將(儀賢)、勘解由長官會合、或布袴、或直衣、殿上地下人甚衆、先馬場獻酒肴、次左府有饗饌、上達部各出馬、左府十疋、右府二疋、左大將一疋、源大納言一疋、左衛門督一疋、修理大夫一疋、勘解由長官一疋、宰相中將一疋、今一疋不足、仍仰方々令出、以左府家司廐司等、各爲左右方人、使政職、惟風朝臣等、令分取出馬等、右大臣、左大將、左衛門督、左大辨、宰相中將出破子、自餘人々不出馬破子等、左右近官人三以上騎射、左五人、右五人、又左右各有立兵一人、時々小雨、騎射々(術カ)仰勅使、鼓所賴光、時方朝臣、左右馬上、皆著打懸、官人物部兵衛等騎、黄昏競了持(時カ)、左右方有樂、龍王、納蘇利儛、秉燭歸、競馬無興、人云不足觀、

十九日、壬午、東宮ノ王子、敦儀、御誕生アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　五月十九日、壬午、東宮女御(綵子)御產、

〔小右記〕五月十八日、辛巳、東宮休所故左大將(濟時)女、今夜子刻許、產男子云々、

内藏貴子解　北山抄紙背　公爵三條公麿氏所藏

原寸　縦〇・三〇八　横〇・四四一

内藏貴子解　申請於非違使所請被任問成所書定返給為宗山殿領伊豫国所帯文状

任被奉勅宣旨令糺明伊豫国所帯文状

右伊地者為祖時財物傳領之間伊豫信乱入於貴子之義光母弟僧覚珍私令勘責云貴子之夫故伊豫守為[illegible]

用米二斛五斗不弁返之状無明白[illegible]

五[illegible]弟者[illegible]伊豫[illegible]

借書者乗内伊妻貴子左右者並而不出其文書暗以勘責後

雖有被[illegible]書行及数年遂不弁而伊米之代[illegible]勘責奉取伊豫守[illegible]

[illegible]文書須成随近刀祢署判而伊豫[illegible]

成伊署判[illegible]之旦[illegible]

[illegible]寺元来引[illegible]相面伊[illegible]

注道理被[illegible]

長徳三年五月廿日　内藏貴子

○親王宣下ノコト、寛弘八年十月五日ノ條ニ見ユ、

二十日、癸未、左大臣道長、法興院ニ詣ヅ、

〔權記〕五月廿日、詣近衛殿、又參院（[illegible]）、左府御共、詣法興院、還日釋法華經、

内蔵貴子解　北山抄紙背　公爵三條公爵氏所藏

原寸　縦〇・三〇八米　横〇・四四一

内蔵貴子解　申請検非違使庁裁事

請被任問状所宣旨返給為往山城国乙訓郡淀草野丹後掾秦兼信

預被奪取庄并私地等券文状

右件地等為祖時財物傳領之間件兼信乱入於貴子之義先母并弟僧覚政私宅勘責云貴子之夫故物部成興存生之間借入用米二斛五斗不弁返之祖母云身孔云汝等早加年々息利件米世五石弁者覚政陳云件米被借者不之由所不知也若有其借書者奈内件妻貴子左右者於而不出其文書暗以勘責縦雖有彼文書何及数年息利而件米之代張勘責奪取地并庄等文書須成随逐力称署判而件兼信為力称長之内為造意首難成件署判母之旦謂慈右地同庄内旦新注家明判即件文書推令見如事无来引成相留件文書等言上望請　裁定被召問件兼信任道理被礼返給所奪取文書等將慰後代永怨仍注事状如前

長徳三年五月廿日　内蔵貴子

〇親王宣下ノコト、寛弘八年十月五日ノ條ニ見ユ、

二十日、癸未、左大臣道長、法興院ニ詣ヅ、

〔權記〕五月廿日、詣近衛殿、又參院（法興院）、左府（道長）御共詣法興院、還日釋法華經、

兼信貴子ノ母及ビ弟ノ宅ニ亂入ス

國司及ビ法家ニ訴フ

○親王宣下ノコト、寛弘八年十月五日ノ條ニ見ユ、

二十日、癸未、左大臣道長、法興院ニ詣ヅ、

〔權記〕五月廿日、詣近衞殿、又參院（詮子）左府（道長）御共詣法興院、還日釋法華經、

内藏貴子、檢非違使廳ニ、山城深草郷住人丹後掾秦兼信ノ爲メニ、屋地等ノ券文ヲ强奪セラレタルヲ訴ヘ、之ヲ糺返セラレンコトヲ請フ、

〔北山抄裏文書〕○公爵三條公輝氏所藏

内藏貴子解申請檢非違使廳裁事

請被任問狀并國判等、定返給爲住山城國紀伊郡深草郷丹後掾秦兼信强被奪取屋并私地等券文狀、

右件地等、爲祖時財物傳領之間、件兼信亂入於貴子之衰老母、并弟僧覺珍私宅、勘責云、貴子之夫故物部茂興存生之間、借用米二斛五斗、未辨返之程、其身死去、汝等早加年々息利、件米廿五石可辨者、爰覺珍陳云、件米彼時借否之由所不知也、若有其借書者、案内件妻貴子左右者、然而不出其文書、暗以勘責、縱雖有彼文書、何及數年息利、而件米之代强勘責、奪取地并屋等文書、須成隨近刀禰署判、而件兼信爲刀禰長之内、爲造意首、難成件署判、因之、且觸愁在地國

長德三年五月二十日

内藏貴子解　北山抄紙背　公爵三條公輝氏所藏

原寸　縱〇・三〇八　横〇・四四一

宰、且請法家明判、卽件文書雖令見知、專无承引、仍相副件文書等言上、望請裁定、被召問件兼信、任道理、被糺返給所奪取文書等、將慰後代永愁、仍注事狀以解、

長德三年五月廿日　　内藏（貴子）

二十二日、乙酉、地震、

〔日本紀略〕一條院　五月廿二日、乙酉、地大震、

〔權記〕五月廿一日、去夕候内、今日罷出、終日甚雨、亥刻地震、

太皇太后宮ノ御惱ニ依リ、阿闍梨勝算ヲシテ、五壇法ヲ修セシメ、又令旨ニ依リテ、施藥院ヨリ、金英膏ヲ奉ラシム、

〔權記〕五月廿二日、左（道長）府有召、御物忌云々、參門外、以孝朝臣傳令旨云、施藥院納金英膏可出、是太皇（昌子）大后宮令旨也、卽向院、廳前屋北庇、立床子爲座、○此間闕文アリ、引見第七辛櫃、○此間闕文アリ、櫃、取出納壺、分○以下闕ク、

〔阿娑縛抄〕百二十五壇法日記　長德三年□□（五月）廿二日、乙酉、宮五壇法始、阿闍梨勝算僧都云々、

〔五壇法記〕長德三、丁酉、月日、被修之云々、

或記云、五月十九日、壬午、參宮、自廿二日可始五壇御修法事定申之、但一度不可行五壇、次第可行、奉顯立五大尊可令修、但如法今明年可重愼御之云々、御惱未平愈給、仍所申行也、廿二日、乙酉、宮五壇法始之、阿闍梨勝算僧都云々、私云、宮者是誰人哉、

二十四日、丁亥、内御物忌、

〔權記〕五月廿五日、候内、御物忌也、

主計助安倍晴明ヲシテ、宜陽殿ノ御劔改作ノコトヲ勘申セシム、

〔中右記〕寛治八年十一月二日、（裏書）長德三年五月廿四日藏人信經私記云、遣召主計助安倍晴明、召問宜陽殿御劔等事、申云、件御劔卅四柄也、去天德内裏燒亡之日、○天德四年九月二十三日ノ條參看、皆悉燒損、晴明爲天文得業生之時、奉宣旨進勘文、所令作也、卅四柄之中、二腰名靈ハ、一腰破敵、一腰守護、但件劔有鏤之歳次幷名等、又同鏤十二神、日月五星等之體也、而燒損之後、不見其文、仍所獻勘文也、御劔樣乃本形也、件破敵、是遣大將軍之時、所給節刀也、一腰是名守護、候御所是也、去天德以後、度々燒亡之後、未被作、件二腰、本是百濟國所獻云々、今日取遣劔身六柄之

破敵ノ劔
守護ノ劔
百濟獻納ノ劔

備前ノ鍛冶

中、靈ハ二腰也、實有其眞、件靈刀等、國家大寶也、必可被作儲者、天德奉勅、以備前國選獻假（鍛造）治白根安生、令燒、其實言高雄山也者、七八月庚申日、必可作此劒者、其故仰作酒令史安倍宗生等也、今年八月廿六日、是庚申日也、然而

改作ノ日時

已爲九月節、又日次不宜、明年七八月庚申日、可被始作歟、

二十六日、己丑

〔權記〕

五月廿三日、遣興福寺（○此間闕文アリ、）

著鈦政、

廷尉永資強盜ヲ捕フ

強盜自（マヽ）ム丸等之由、即給祿、此夜、右衞門少尉永□（資）參捕（○此間闕文アリ、）

廿四日、候內御物忌也、藏人左衞門尉則光來宿所、傳左（權長）府命云、別當消息云、□高（○此間闕文アリ、）同類清□宗正、三宅得正、且（○此間闕文アリ、）攝津、相次可給官符、若有（○此間闕文アリ、）被仰、又昨夜永資等、捕進□盜同類、（○此間闕文アリ、）等爲追捕、差左志錦爲信、右尉永資、□□忠明等、下遣近江國、且給供給宣旨、且可被仰隨使觸差副人兵、可令追捕之由、可給宣旨之由、可奏聞、（是則右衞門督所被申云々、）即宣旨下、左大（權長）臣、物部大□、則光又傳院（詮子）御消息云、甲斐守忠規從者、日者候獄所、忽有所煩云々、暫可免給假、即奏、仰云、早可免給、

強盜追捕ノ宣旨ヲ下ス

忠規ノ從者ニ假ヲ給フ

〔西宮記〕

臨時十一　或記云、同（長德）三年五月十（廿）六日、時々降雨、著鈦政、著官人云

平忠宗等強盜三人ヲ捕フ

著鈦囚十六人

允亮童子丸ヲ著鈦スベキヤ否ヤヲ申ス勘

云、子（ケイ）刻許、住人走來云、去廿三日、於今（マヽ）山崎、逃脫盜人在西寺邊者、（彼廿三日、件盜人同類三人、追捕之間、與左平尉等合戰、射殺南尉（ケイ）隨身火長一人、又射傷耶等一人、指東山逃去、有到大津之聞、南尉右志忠信、左志爲信等、向彼津也、）（朱書）「南永賢法家官人也、」大夫尉志理明、府生伊遠好兼等、乍束帶、々弓箭馳向、途中相會平尉忠宗等、共追捕、即捕得盜人三人、奏事由、別當云々、但追捕官人等、示送可行著鈦之由、仍行畢留官人、只余幷藏人尉、右志忠國、以申、府生清淵等四人也、著鈦囚十六人、左八人、右八人、今日以左囚三人渡右、令著鈦爲等數也、古實左囚一人、必增右囚之數、免囚二人、左縣守近、奏童子丸、（件童強盜、同類而所申年十三者、仍令道官人勘之處、申可徵贖之由、仍今日辨免、）

〔政事要略〕

八十二　糺彈雜事二　議請減贖事

勘申奏童子丸可著鈦否事

右童子丸、強盜之犯承伏、進過狀、而生年十三、猶可著鈦哉者、名例律云、年七十以上十六以下、犯流罪以下、收贖、八十以上□（十イ）歲以下、盜亦收贖、疏云、盜既侵損於人、故不許全免、令其收贖、又云、犯罪時幼小、事發時長大、依幼少論、疏云、十六時、偸盜十七事發、仍以贖論、此名幼小時犯罪、長大事發、依幼小論者、偸盜犯之輩、雖（有脫カ）科條、十六以下之者、須用贖法、童子丸尋勘所稱之年、未過所指之限、唯今徵銅、非可著鈦、仍勘申、

長德三年四月廿九日　允亮（惟宗）草

死穢
一品宮家ノ死穢

衞府公卿弓箭ヲ帶シテ座ニ候ス

内裏觸穢、

〔小右記〕五月廿六日、己巳（丑）、外記相門（林）云、左大臣（道長）傳仰云、内裏有死穢、不參内之上達部、不可參入、依可有神事、昨日有一品宮（修子内親王）死穢、彼宮下女、今朝著座此宮、内裏穢、一品宮穢交來、

二十七日、庚寅、季御讀經、

〔參議要抄〕上　季御讀經事　或記云、警固之間、有御讀經之時、長德三年五月廿七日、衞府公卿帶弓箭候座、行香之時、脫置弓箭劍於御前、不放綏、事了、又如元著之、堂童子衞府奉仕、又如此云々、時方（源）放綏、爲失云々、

藏人ヲ廣澤ニ遣シテ寛朝ヲ召ス

勅使院ニ參ル

行成勅命ニ依リ其第ニ向フ

六月　大盡　癸巳朔

五日、丁酉、結政、

〔權記〕六月五日、○中略予（行成）自院（修子）參内、宿所東帶、著結政、

東三條院ノ御惱ニ依リ、大僧正寛朝ヲシテ、御修法ヲ行ハシム、

〔權記〕六月四日、或云、左丞相（道長）固□勿○此間闕文アリ、東三條（修子）院御惱危急、忿參給云云、仍馳○此間闕文アリ、甚重、早參内奏事由、相○此間闕文アリ、由蒙仰、赴廣澤、藏人、○此間闕文アリ、御馬、同奏事由令召也、各令乘之、○此間闕文アリ、僧正（寛朝）□勅命不可遁、乃被參、令左衞門尉奏參入由、與僧正相共參院、此間夜曙、

五日、頭（藤信）中將爲勅使參院、又仰大僧正御修法可奉仕由、○下略

〔小右記目錄〕二十御惱事　長德三年六月五日、女院御惱事、

○東三條院ノ御惱ニ依リテ、同御所ニ行幸シ給フコト、六月二十二日ノ條ニ、相撲召合ノ音樂ヲ停ムルコト、七月三十日ノ條ニ見ユ、

八日、庚子、左大臣道長病ム、

〔權記〕六月八日、候内、早朝或者云、左丞相（道長）自夜中許煩給、卽奏案内、蒙勅命就第、奉問後命（マヽ）、

〔小右記目錄〕二十臣下　御惱事　長德三年六月九日、左府所惱事、

十日、壬寅、御卜奏、

〔日本紀略〕一院　六月十日、壬寅、御卜奏、付內侍奏之、案立陣外、依內裏穢也、

十一日、癸卯、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕一條院　六月十一日、癸卯、月次祭、依穢付本官、

〔園太曆〕十四　貞和六年十月五日、

月次神今同例、（內裏穢時所司行事）長德三六十一、

內裏ノ穢ニ依リテ案ヲ陣外ニ立ツ

穢ニ依リ神祇官ニ付シテ行ハシム

河內若江郡ノ住人美努公忠等、前淡路掾美努兼倫ヲ殺害セントス、仍リテ、兼倫、檢非違使廳ニ訴ヘテ、公忠等ヲ捕糺セラレンコトヲ請フ、

〔北山抄裏文書〕○公爵三條公輝氏所藏

前淡路掾美努兼倫解申重請檢非違使廳裁事、

請被裁捕糺、爲居住河內國若江郡、犯人美努公忠、同利忠、秀友、惟友、坂上致孝、多米清忠、茨田友成、恩智常□、同忠正、弓削重忠、美努吉平、同行利、友利等、以今月五日寅時許、擬殺害兼倫等、數射物搜取不安愁狀、（副追記）

右兼倫謹案事情、件犯人公忠等、號（昌子）太皇大后宮史生美努眞遠所由、連夜伺隙

公忠等太皇太后宮史生ノ所由ト號ス

兼倫ノ解文

□□（伊）豆前掾美努公胤、幷兼倫等、注擬殺害之由具旨、以先日言上已了、而未蒙□定之間、以今月五日夜寅時許、從四方、馬兵十五六騎、步兵廿餘人、俄兼倫私宅□□、妻子等共相捕縛、擬殺害間、隨近人々、幷彼郡使上野掾源訪等、驚聞馳□□何事、兼倫幷妻子捕縛、擬殺害問程、憚彼訪來、集陳云、國司在京之間、□□所下文、可勤仕郡司職者、供御稻事、爲充行所來著也云々、而訪答云、於御□（稻カ）事者、依無郡司、以先日刀禰、共可勤行之由、蒙國宣了、仍件兼倫幷美努兼□（倫）□率鄕中作田、數令持進先了者、件公忠罷還已了、其後兼倫罷入私宅□□□□財物之處、無一物遺、悉以紛失、是則依有眞遠所由所致也、就中件公忠□□後、被追捕之間、同類共以逃散、只爲宅山野、而以去四月上旬之比、從大和國幷□□（近江カ）國大津之邊居住、語取赦免不善之輩、本宅還來、造箭倉於四方、屢京□□經一兩日、每還向、不知面人隨身一兩人、彌成所部之犯、企殺害之計、靜案事□□于犯人公忠、以猛意居住於本宅、懷愁兼倫幷所由伴類等、失居□□不留跡□間、農業已以絕了、爲愁之甚、莫過於斯、望請使廳裁、且被□□□□公忠幷數十人同類、且被糺返紛失之財物、將省事之危、成農業勤、仍□□狀、以解、

長德三年六月十一日　　前淡路掾美努「兼倫」（自署）

財物ヲ奪フ

同類ト共ニ逃散ス

箭倉ヲ造ル

兼倫ノ私宅ヲ襲フ

十三日、乙巳、諸卿ヲシテ、高麗ノ牒狀竝ニ大宰府申請ノ四箇條ニツキテ、僉議セシム、

〔小右記〕六月十二日、甲辰、(儉賢)勘解由長官云、高麗國啓牒有使辱日本之句、所非無怖畏者、前丹波守貞(頼)副朝臣來云、大貳消息、徵城(城内九カ)六箇國人兵、令警固要客(害)、又高麗國使日本人云々、

十三日、乙巳、參宮少選(昌カ)參內、右大臣、左大將、民(保忠)部卿、式(師任)部大輔、左衞門督、右衞門督、左大辨、宰相中將、勘解由長官同參、左中辨行成(藤原)奉詔下、賜右大臣太宰府解文、高麗國牒三通、一枚牒(日)同本國、一枚牒對馬(島)司、一枚同島、諸卿相共定申、大略不可遣返牒、又警固要害、兼致內外祈禱事、又高麗牒狀、有令記(脫カ)日本國之文、須給官符太宰、其官符文、注高麗爲日本所稱之由、又可注事者、高麗國背禮儀事也、商客歸去之時、有披露彼國歟、但見件牒、不似高麗國牒、是若大宋國謀略歟、抑高麗使太宰人也、若不可返遣、可被勘其罪、太宰申請四箇條、九國戎兵具皆悉無實、可令國司修補事、若其無其勤(難カ)、有他功、不可預勸賞者、定申云、先可造要須戎具也、不可申止勸賞事、九國戎(城カ)內諸神可授一階事、定申云々、先被祈禱、相次可被定下、可加寄香椎廟內大臣封廿五戶事、定申云、可被加寄歟者、對馬守高橋(他)件堪、非文

牒狀ニ日本ヲ呼シム句アリ
高麗國使ハ日本人
牒狀三通
要害ノ警固
內外ノ祈禱
高麗ノ牒狀ニ似ズ
宋國ノ謀略カ
大宰府申請ノ四ケ條
具修補
戎ノ階昇級ノコト
神ノ階昇級ノコト
香椎廟ノ封戶增進ノコト

非武智略又乏、以大監平中方、著(差)遣彼島、備不虞事、定申云、如府解、注件(他)堪非文何、如府申請、先差遣中方、隨又申請、乍有可被定下也、府解文云、中方身爲文章生、又習弓馬□(云々カ)戌刻許各退出、又北陸山陰等道可給官符之由、僉議了、上達部云々、大宋國人近在越前、又在鎮西、早可歸遣歟、就中在越州之唐人、見聞當州衰亡歟、宰(寄カ)來近都國、非無謀略、可恐之事也者、(○十一月十一日ノ條參看、)

〔水左記〕承暦四年九月四日、癸巳、(○略)中頃之右(俊家)相府被參、議定高麗返牒仰詞也、匡房朝臣注出牒□(狀カ)乖禮度之事、(○略)中一不差使事、長德三年符云、須專國信先達大府、何脅斷綆漂流之客、以爲行李、啓牒之信事、乖(違カ)被制云々、

〔百練抄〕一四條天皇　六月十三日、諸卿定申高麗國牒狀事、僉議不可遣返牒、可警固要害、又牒狀不似高麗國牒、是大宋國之謀略歟、

二十二日、甲寅、東三條院ノ御惱ニ依リテ、同御所ニ行幸アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　六月廿二日、甲寅、天皇、行幸東三條(銓子)院、

〔小右記〕六月廿二日、甲寅、巳刻許參內、同四刻幸女院、依御惱重、進察刻限午二刻許也、鈴奏警蹕侍衞如例、左大臣、(實資)大將、(公季)源大納言、(時中)右大將、(實經)民部卿、(懷忠)大貳、(有國)途中參入、左衞門督、(懷平)修理

官符
北陸山陰ニ官符ヲ下スニ關スル世評
對馬ニ大監平中方ヲ遣スコト
厄從ノ公卿

還御

奏樂ナシ

安倍晴明ヲシテ日時ヲ勘セシム

夜御裝束紫宸殿ニ出御

大夫、左(高遠)兵衛督、以上非參議、右(公任)衛門督、左(扶義)大辨、右(補忠)大辨、宰(伊周)相、勘(俊賢)解由長官扈從、式部(輔正)大輔留守、右大臣追參院、還御騎馬扈從、著螺鈿劒、著白單衣、尋常之時、大臣著白單衣、甚無便宜、何剋行幸儀、就中指隱文帶、佩螺鈿劒、著用白單衣、人々屬目、又民部卿同著白單衣、不知故實歟、今日上達部著隱文帶螺鈿、雅樂寮依例祗候、然而不奏音樂、依院御惱歟、晩頭還御、

〔權記〕六月十七日、依仰、令晴明(安倍)○此間闕文アリ、幸東三條院日時云、今月廿二日、甲寅、時巳○此間闕文アリ、御出東門云々、奏聞○此間闕文アリ、仰云、大臣被申依有所○此間闕文アリ、之由、卽奏事由、仰民部卿所々饗(之來)裝束掃治等事、仰大夫史國平朝臣了、

廿二日、遲明參內、催行々幸雜事、行事源進士、召內藏寮官人、預御調度并夜御裝束等、巳二點、供御裝束、件御裝束例、御匣殿所獻也、而俄難調獻之由令申、仍仰縫殿令奉仕也、右兵衛佐時方候之、次御出南殿、晴明奉仕御反閉、次闈司就版、少納言鈴奏、今日雅樂寮雖候不奏音樂、是依院御惱、有此行幸之故也、予奉勅、仰左丞(道長)相○此間闕文アリ、成(行成)、還御之間、比至上東門、○此間闕文アリ、近衛陣執笠、相□殿上人○此間闕文アリ、殿上人皆置笠、近衛陣猶執之、先例奉○此間闕文アリ、々下仰外記云々、而今日左近中將正光朝臣、奉勅仰左大將(公季)、々々不被仰外記云々、

○東三條院御惱ノコト、本月五日ノ條ニ見ユ、

中宮、職曹司ニ遷御シ給フ、

〔日本紀略〕一條院　六月廿二日、甲寅、○中略　中宮(定子)參職曹司、

〔小右記〕六月廿二日、甲寅、○中略　今夜中宮參給職曹(職曹)宮司、天下不甘心、彼宮人々稱不出家給云々、太希有事也、外記令申可扈從行啓之由、然而不候、行啓事戶部承行、

〔百練抄〕四　一條天皇　長德(三)二年五月一日、○中略　中宮定子、依帥事出家、六月廿二日入內、人以不甘心、

〔榮華物語〕五　うら〳〵のわかれ　かくてとしもかはりぬれは、ついたち(長德三年)は朝拜なとして、よろつめてたく過もてゆくに、花の都はめてたきに、かのたひの御ありさま共、春やむかしのとのみおほされつゝ、あはれにとしさへへたゝりぬるを、よろついとおほつかなく、あまたの霧たちへたてたる心ちせさせ給ふ、かの二條の北南とつくりつゝけさせ給しは、殿(伊周)おはしましおり、かたへはやけにしかは、今はひとつにみなすませ給しを、この帥殿の御くたりの後、程もなくやけにしかは、このみこ(脩子)なともむまれ給へかり

中宮惟仲ノ第ニ住マセ給フ
天皇若宮ハ墓セ給フ

しかは、平中納言惟仲かしる所有けり、それにそ、女院（詮子）なとおほせられてすませ給ける、内にはわかみや（皇子）の御うつくしさを、いかに〳〵と女院もきこえさせ給へと、つゝましき世のありさまなれは、覺したゆたふへし、殿（道長）なとやいかゝおほしめさんとおほすらん、ことはりにこそ、宮（定子）のそのまゝに、例の御有さまにおはしまさぬにより、あからさまにまいらせたまはんこともいかゝにと、つゝましうおほすなるへし、つねの御ことくさのやうに、ゆかしう思ひきこえさせ給御ありさまを、女院はいと心くるしき御ことに覺しめせと、さすかに若宮の御前のかきり、參らせ給へきにはあらすかし、

若宮ノ御乳母

わかみやの御めのとには、きたの〻（遠度）三位とてものし給ひし人の御むすめなとも參りけり、それも九條（師輔）との〻御子といはれ給ひし人也、又辨のめのとや、少輔の命婦といふ人、さま〳〵さふらふ、はかなくなつにもなりぬれは、わか宮の御ありさま、いとうつくしうおはします、たひの御せうそこも、日毎にといふはかり也、あはれにおほつかなうのみおほしみたる、二位（成忠）此わか宮みたてまつりにとて、よのほとまいれり、宮の御前あはれに御覽して、さくりもよゝとなかせ給、宮のいみしううつくしうおはしますを、二位

外祖父成忠中宮御所ニ參リ若宮ヲ見奉ル

ふみまけうつくしみたてまつり給ふ、あはれにう（宣子）への御かはりには、おまへをこそはたのみましてさふらふまゝに、明善もえみ奉らぬことをなん、さても内には、この宮をいとゆかしき物に思ひきこえさせ給へは、いらせ給へしなとこそはよには申めるを、いかゝは覺しさためさせ給らん、おひ（成忠）の身は、さへき人も物をなんきかせ侍らさりけると申給へは、こゝにも母（宣子）の御かはりには、いかてとこそ思きこえさせ侍れと、そのことゝなく物さはかしきうちに、このみやの御あつかひに、はかなくあけくれてこそ、うちよりも、この宮を今まておほつかなくてあらせたてまつることなと、まめやかにのたまはすめり、女院もその御けしきにしたかはせ給にやあらん、猶ゐていりたてまつれとこそはの給はすめれと、いさやよろつつゝましうのみおほえてこそ、いかにせましと思ひやすらはれ侍れ、よろつよりもかのたひの人々を、いかに〳〵とおもひ物するこそ、いみしうあはれに心うけれ、さりともいとかくてやむへうは、いかてかとのみこそは、内にもいみしう心くるしきことに、の給はすなれとの給はすれは、たひ〳〵夢にめしかへさるへきさまに見給ふるに、かく今まてをとなくはへるをなむ、な

入内ノ御催促

成忠入内ヲ勸メ奉ル

中宮若宮ト共ニ參ラシ給フ

をさるへく覺したちて内にまいり給へ、御いのりをいみしうつかうまつりて、ねて侍りしゆめにこそ、おとこみやは生れ給はんとおもふ夢みて侍りしかは、このことによりて、なをとくまいらせ給へと、そゝのかしけいせさせんと思ふたまへられてなむ、おほくはまいりはへりつるなり、御文にては、おちちるやうもやと思ふ給ひてなむなとそゝのかし、なきみわらひみ、よひとよ御物かたりありて、曉にはかへり給ぬ、宮（定子）の御前の御うちまいりの事、そゝのかしけいしつるにそ、おほしたゝせ給へる、明順、道順よろつにそゝき奉る、國々の御封なとめし物すれと、ものすかやかにわきまへ申人もなけれは、さるへき御さうなとそきぬなと奉らせんなと、案内申人ありけれは、きぬめしてよろつにいそかせたまふ、宮（脩子）おはしますたひなれは、よろつ御けはひことなり、御こしなとは、こたいにあるへき事なれは、御車にてとそおほしめしたる、いとゝつゝましく宮（定子）おほしたれと、なとてかなをもろともにと聞えさせ給へは、かの二位のそゝのかしきこえし事もあれは、さはとてもろともにまいらせ給ふ、人のくちやすかるましうおもへり、かくて内に參らせ給よは、おほ（道長）との、さるへき御せんまいるへきよしお

東三條院若宮ヲ懐キ給フ

中宮東三條院ト御對面アラセラル

天皇中宮ニ御對面アラセラル

ほせらるれは、みなまいりたり、殿の御心ありさまの、いみしうありかたくおはしますことかきりなし、かくてまいらせ給へれは、女院いつしかとわか宮をいたき奉らせ給へは、いとうつくしうおはします、うちゑみて哀にみたてまつらせ給、いとおかしけにこえさせ給へり、御物語なにとなく物はなやかにまうさせ給へは、まつしるものにおほさるへし、みや（定子）よろつにつつましきことをおほしめすに、院と御たいめんありて、つきせぬ御物語を申させ給ほとに、うへわたらせ給て、わか宮みたてまつらせたまふ、えもいはすうつくしうおはしまして、たゝわらひにわらひ、ものかたりせさせたまふ、うへの御前、いまゝて見さりけるよとおほしめすに、まつ御なみたもうかはせ給へし、ましてめされける、さて宮に御對面あるに、御木丁ひきよせて、いとけとをくもてなしきこえ給へる程もことはりなれと、御となふらをとをくとりなして、へたてなきさまにて、なきみわらひみきこえさせ給ふに、いにしへに猶たちかへる御心ちのいてくれは、宮いと〳〵けしからぬ事なりなと、よろつに申させ給へと、それをもきこしめしいれぬさまにみたれさせ給ふ程も、

曉ニ御退出アラセラル

職曹司ノ經營

天皇ノ御寵愛

中宮御懷妊

かたはらいたけ也、萬にかたらひきこえ給ひて、あか月に出させ給へけれと、猶しはしみや(脩子)見つくまて、今四五日はと申させ給て、職の御曹司に曉にわたらせ給て、そこにしはしおはしますへくしつらはせ給、うへもよろつにおほしめしはゝからせ給ふ事おほくおはしませと、ひたみちに、たゝあはれにこひしう思ひきこえさせ給つる程なれは、人のそしらんもしらぬさまにもてなしきこえさせたもふも、このかたはすちなきことにこそあめれ、宮の御前は、よのかたはらいたさをさへ、物なけきにそへて覺しめすへし、女房たちむかしおほへて、あはれに思へり、さて日ころおはしまして、なをいと程とをしとて、ちかき殿にわたしたてまつりて、のほらせ給ふことはなくて、われおはしまして、夜なかはかりまておはしまして、後夜にそかへらせ給ける、御心さしむかしよりもこよなけなり、このころさふらひ給女御たちの御おほえ、いかなるにかとみえさせ給、とく出させ給へかりけるを、なをしはし〳〵との給はせける程に、ふた月はかりおはしますに、御心ちあしうおほされて、れいせさせ給ふこともなけれは、いかなるにかとむねつふれておほさるへし、うへかくと聞かせ給にも、まつあはれなる

中宮ノ御心事

隆家成忠ノ祈禱

中宮御退出

御文隙ナシ

伊周ノ悅

中宮天皇ニ伊周隆家ノコトヲ歎キ給フ

契をおほししらせ給ふ、返々もかくてあるへかりける御ありさまを、かくいさゝかなる事ともを、世人もきゝにくゝ申し、わか御心ちにも、よろつにゆめの世とのみおほしたとらるへし、たしまには(隆家)、かゝることゝもをきゝ給て、たゝ佛神をのみいのりね給へり、二位はいとゝしき御祈やすからんやは、宮はかくて御こゝちくるしうおほさるれは、せちにきこえさせ給て、出させ給ぬ、其程弘徽殿(義子)承香殿(元子)なと參りこみ給、されと御心さしの有さまこよなけ也、内よりは萬にさま〳〵のおほつかなさを、御ふみひまなし、おほかたにては、ひませなとのつかひあり、右近の内侍そ、さりけなきつたへ人にてはさふらひける、二位かやうの御事ともをきゝて、いとゝうれしう、ゆめのしるしあるへきとおもひて、いとゝしき御いのりたゆます、つくし(伊周)にもかゝることをきゝたまひて、よろつにさりともと、たのもしくおほさるへし、○中略月日も過もていきて、宮の御はらもたかくならせ給へれは、哀に心ほそくおほされけり、はるかなる御ありさまともを、わりなきことに申させ給しかは、うちにもいとこゝろくるしき事におほしめして、つねに院にもかたらひ申させ給、

職曹司ノ庇ニ住ミ給フ

〔河海抄〕十一 横柱　御記云、○中略 后宮等、職曹司有之、定子皇后宮(坐カ)時此所給之時、母屋依有鬼物、住庇給、其時無南門云々、

○中宮御落飾ノコト、二年五月一日ノ條ニ、伊周、隆家ヲ赦免スルコト、本年四月五日ノ條ニ、伊周歸洛ノコト、同十二月是月ノ條ニ見ユ、

實資ノ評

二十三日乙卯、丹生、貴布禰兩社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　六月廿三日、乙卯、於侍從所、被遣丹貴社奉幣使、

大納言左近衛大將藤原公季ニ、任内大臣ノ兼宣旨ヲ賜フ、

〔日本紀略〕一條院　六月廿三日、乙卯、○中略 大納言公季卿、蒙可任内大臣宣旨、

〔小右記〕六月廿三日、乙卯、今日可任内大臣之宣旨、左大將(藤原)公季卿承之、太無故事也、

○公季ヲ内大臣ニ任ズルコト、七月五日ノ條ニ見ユ、

是夏、飢饉、

〔小右記〕七月廿八日、庚寅、右衞門府生保年申云、○中略、相撲樂停止ノコトニカヽル、七月三十日ノ條ニ、收ム、今夏飢饉無極、于今不止、不可有樂之年也、○下略

七月大　盡　癸亥朔

三日、乙丑、權律師靜安寂ス、

〔僧綱補任〕三　○興福寺本　權律師靜安　永祚元年十二月廿七日任、天台宗、延曆寺、（朱書）御導師勞、六十五、長德三年七月三日入滅、（朱書）「七十三」

〔僧綱補任〕○乾德川昭武氏本　權律師靜安　天台宗、延曆寺、永祚元年十二月廿七日任、御導師勞云々、或本長德二年、任律師云々、可尋、長德三年五月七日、任權律師、年七十三、臘五十七、故座主大僧正大和尚弟子、律師覺惠入室、天慶四年五月十一日、得度受戒、天延三年四月九日、依門徒阿闍梨大僧都良源奏、爲元慶寺阿闍梨、增恒死闕替、長德四年七月三日卒、七十四、號花山律師、慈德寺、元慶寺別當、

官歷

長德四年示寂トノ說花山律師ト號ス

四日、丙寅、廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕一條院　七月四日、丙寅、廣瀨、龍田祭、

廢務、

〔權記〕七月四日、○略　中今日廢務、○以下闕文

五日、丁卯、大納言藤原公季ヲ內大臣ニ任ズ、

〔公卿補任〕六

內大臣正三位藤公季　四十七、七月五日任、

大納言正三位藤時中　七月五日按察使、

藤道綱　七月五日任、

權大納言正三位藤懷忠　七月五日任、

中納言從三位藤時光（位實資上）　七月五日任、

〔日本紀略〕一條院　七月五日、丁卯、宣命、內大臣公季、大納言道綱、權大納言懷忠、中納言時光、天皇不出御、

宣命

出御ナシ

〔小右記〕六月廿五日、丁巳、或人云々（密）、以民部卿懷忠可致（被カ）任大納言、以□（右）大將道綱、可被加權大納言云々、並戶部任日上蔕、事理相當、右大將爲任日下蔕（一年）、下蔕、而可被越任之由、未得其理、深不知食歟、偸見先例、以大將不越先任人、延喜聖代、定國大將、爲越國經通明大將、不越昇（忠）、天曆御時、師尹大將、不越在衡、唯貞（忠）信公、越湛（忠）、昇兩人也、有其故、不可爲例、定國者延喜聖主外舅、又是明從（此下脫字ア）ラン、而殊無抽賞、具存竹帛、若被行彼二朝例、以右將軍、難被抽用歟、但ム不惡加權品、陳事理、乍知食此日（由カ）、於被抽右將、更不可申之由、有便宜者、可奏事、相示勘

下蔕ノ大將越任ノ例

道綱ノ昇任ト實資ノ批評

東三條院朝事ヲ專ニシ給フ

解由了、

七月九日、丁卯、今日大臣召云々、有所思不參入、右衞門督同不參入云々、大外記致時朝臣、宣命案內告送之、今日以大納言藤原公季爲內大臣、以中納言藤原道綱爲大納言、以中納言藤懷忠爲權大納言、參議藤時光爲中納言、道綱去年任中納言、下官去長德元年任權中納言、而以道綱被抽任之故、未得其心若以外舅幷大將所被抽歟、延喜聖主、以定國大將外舅、不被越國經、延喜天曆等例、先□令漏奏了、已被仰知食由、只依次第、有可被任懷忠一人之氣色、而被加道綱、左僕射一日令奏、康保四年、伊尹越師氏、任權大納言之例、是村上先朝之例也者、極所驚駭、村上先皇、彼年五月廿五日崩、同年十二月、以伊尹任權大納言、謂□云、村上朝之年號、除目者冷泉院之除目、代々極、冷泉院御宇耳、牢籠之詞、萬事推量、用賢之世、貴賤研精、而近臣頻執國柄、母后又專朝事、無緣之身處何爲乎、又令勘解由、令良相例云々、彼間事人不敢知、文德天皇代也、算年紀百四五十年、又彼賢能人也、抽賢之世歟、延喜聖代、以貞信公被抽任也、又抽賢用能之時也、今以後被抽道綱、未知其理、僅書名字、不知一二者也、又勘上古例、可被行者、以法師任大臣、可爲大納言歟、豈爲能例乎、大納言時中行今日內辨云々、權左中辨相方、大外記致時朝臣告造宣命事、依有所思不參內、左衞門督同不參入云々、平中納言依長宥不參、勘解由長官依病不參入云々、

日時奏

〔權記〕六月廿五日、有召、晚景參內、頭中將傳勅、仰左大將可任內大臣、□令勘申云々、

廿七日、詣左大將殿、有召也、被示云、先日正光朝臣有所傳仰、仍令勘、來月五日吉已、此由可奏、於里第令奏、如何、

七月四日、依勅明日可任○此間闕文アリ、仰大夫史、依左大臣定也、刻限□□□、今日廢務、○此間闕文アリ、勅仰□丞相、々々仰余、又遣召大外記改□□□□、申刻遣左大史國平

紫宸殿裝束

朝臣仰了、此夜罷出、

五日、丁卯、早朝參入、催行雜事、今日行事藏人廣業、所司裝束南殿、巳刻式部省立標、藏人丞行資、出自弓場殿、斜行於○此間闕文アリ、所、同刻源大納言時中、參候左仗、卽參御前、奏源朝□參入由、勅曰、令作任大臣以下宣命、以大納言正三位藤原朝臣公季任內大臣、中納言正二位藤原朝臣道綱任大納言、中納言正三位藤原懷忠任權大納言、參議從三位藤原時光任中納言等之趣也、○此間闕文アリ、我○此間闕文アリ、左大將宣命詞、朕外男云々、懷忠去正曆○此間闕文アリ、時光參議勞廿二年、權中納言惟仲轉正、無著座者、忽不可行外記政、仍暫不可轉任也、卽著膝突、□

宣命ヲ奏ス

□□□在□□□□言令召大内記(紀)齊名朝臣仰之、未刻大納言參弓場殿、令奏宣命草、御覽之後、被仰云、内大臣先帝親舅、大納言朕外舅、其□共外戚也、但親與外、若有差別歟、問内記、無殊難者、可□(令)清書、即仰大納言、々々問齊名、申云、字雖異意是同、□所奉仕也者、即奏聞事由、又清書奏之、未四刻右大將道綱卿以下、引著外辨、(今日不出御、)次近仗陣階下、(著等如□□)次掌侍義子臨東檻、大納言時中卿參上、著兀子、次開門闈司出、内辨召舍人、(二闕文アリ、)(音、○此間○此間闕文アリ、)少納言統理參入就版、内督誠信、左大辨扶義、右大辨忠輔、左近中將齊信等參入、各就版了、内辨召齊信朝臣、稱唯、揖而斜行、入自殿東軒廊、昇自東階、立内辨後、(長押下、)内辨授宣命、(件宣命、内辨欲參上之時、内記豫所奉、取副笏持之也、)齊信朝臣受之、退降、立軒廊西第一間、内辨退下、出東二間、斜行就標、訖齊信朝臣出同間、直進南當宣命版揖、而更西折就宣命版揖、而挿笏宣制一段、群卿再拜、又一段、群卿再拜、(件兩度任人不拜、)又欲開欲(府カ)讀、(失也、須臾覺悟卷之、)訖經列西、(○此間闕文アリ、)了大納言道綱卿、權大納言懷□(忠)、(○此間闕文アリ、)標、再拜儛踏、訖退出□外、頃之(○此間闕文アリ、)左近權藏人頭中將正光朝臣奏慶由、訖更召、令奏可被聽新任饗祿之由、仰云、依請、即於陣壁後、仰源大納言、次少納言、外記、辨、史、官掌等、列立

宣制

再拜儛踏

正光奏慶

外記西門以北、(辨史在東、少納言外記、史在左衛門陣屏下、又在此夫、)次内大臣出門、立南架西、(北面、)次出立、東面南上、(第一二人少向辰巳方、)最末參議並步北行、諸列皆北下出也、到左近左兵衛府門西、夾道立、(辨在南、少納言在北、)參議以上次第東行、東上南面列立、大臣進東、到參議前許之比、南列辨引渡北立、參議列西二許丈、南面東上、次列於南北、外記○此間闕文アリ、南上立、(五位依位次、)大臣未到門二丈許、西向揖、(○此間闕文アリ、)以下次第出、到内大臣東□第、(一品文○此間闕文アリ、三條宮文○此間闕文アリ、)庭東(東闕)庭中主人先下、立南階西邊、(客亭在東放出也、)拜禮之後、各著座、次第如例、事訖各々分散、此日次第可尋書、

時中等著座

上表三度ニ及バズ

十一月廿二日、癸未、○(略中)早旦左府((諸脫カ)略中)、又依仰、々未著座上卿可早著之由、源大納言((道綱))、右大將民部卿((實資))、太皇大后宮大夫、各申年中無吉日、仰云、令勘日可給、

〔定家朝臣記〕康平三年七月廿四日、殿下((頼通))召大内記正家、被仰云、内大臣先々上初拜三度表(ヲ)哉、令申云、不見其例、去長德之比、閑院((公季))太政大臣任内大臣、最初上表時人難之、仍不及三度者、

○時中等著座ノコト、便宜合敍ス、公季ニ任内大臣兼宣旨ヲ賜フコト、六月二十三日ノ條ニ見ユ、

九日、辛未、内御物忌、小除目、是日、左大臣道長、雜事ヲ定ム、

〔公卿補任〕六

内大臣正三位藤公季、四十一、七月五日任、大將如元、（九日脫）

大納言正三位藤道綱　七月九日右大將如元、同日春宮大夫、

權大納言正三位藤懷忠　七月九日民部卿如元、

參議正四位下源扶義　七月九日大藏卿、

〔日本紀略〕一條院　七月九日、辛未、除目、内大臣左大將如元、大納言道綱右大將如元、

〔小右記〕七月九日、辛未、今日除目、左右大將、民部卿如元、左大將内大臣、右大將道綱、民部卿懷忠、

春宮大夫道綱、大藏卿左大辨扶義、民部少輔大江清通、辭伯耆守者也、恩破抽心、任民部少輔、未得厥心、

伯耆國□己□（亡）（弊カ）仍所辭退也、隨申請被任京官、天恩之甚、下府之所（後カ）奉行也、伯耆守源政職、造朱雀院馬場功、攝津守藤原理兼、去年任尾張守者也、而稱（後カ）國不知、申此國可謂（歟アラン）意、豈是聖務乎、尾張守藤原爲光、（知カ）今年任攝津守者也、而今在人心、民部少輔及兩國相替事、左府殊所奏定、天下貴賤彌以歎悲、大臣召及今度除目、亂世政也、今日雖有陣召、不參入、入夜（後暗）勘解由長官來、告除目案内、

八月十三日、乙卯、伯耆守政職來、觸赴任之由、談話之後、與少祿（黄朽葉下襲）

〔權記〕七月九日、丙大臣昇殿事、依勅仰出納允政爲藏人所小野爲雅召之、此

實資ノ批評

公季昇殿

日、左大臣有被定申雜事、其次有小除目、先下給申文八枚、（舊吏忠信、永信云々、別功政職則友云々、）諸司貞潔、遠高仰云、伯耆守清通辭退之替、可任人可擇申、頃之、大臣令奏申文四枚、（貞潔、忠信、政職、則友、）出御畫御座、（依御物忌、御簾不卷也、）召左大臣、々々參上、召紙筆有除目、○此間闕文アリ、大藏卿扶義、兼、左大將公季、兼、右大將□□（道綱）○此間闕文アリ、兼、尾張守知光、伯□□□□（書守政職）、輔清通、攝津守理

八月十九日、○中略　攝津守理兼朝臣於掖陣下、令奏赴任之由、被仰可能廻吏術勵節施治之趣、即給祿、雖身候殿上、依御物忌、不召御前、（受領等罷申之者、召御前例也、況其身候殿上、必召之、可賜仰并祿也、然而依御物忌、不召也、）

十七日、己卯、文章生試判、

〔權記〕七月十九日、辛巳、○中略　早朝與右兵衞佐時方同車、參左府、式部大輔參申、去十七日試判事、

〔本朝文粹〕七　奏狀下　省試詩論

請特蒙天裁、召問諸儒決是非、今月十七日、文章生試判違例不穩雜事狀、

大江匡衡

一諸儒同心、不令知匡衡、忽成摠落判事、

（書陵部本）

長德三年七月十七日

中文八枚

畫御座ニ出御

理兼赴任ノ由ヲ奏スル

御物忌ニ依リテ御前ニ召サレズ

大江匡衡試判ノ違例不穩ヲ糾サレンコトヲ請フ

諸儒匡衡ヲテ捴除落外シ判ルヲ落シタ

紀齊名學生大江時棟ノ詩ニ病累ト稱シア強リテ落第セシメシ

右謹檢案內式云、凡擬文章生者、春秋二仲月試、試畢喚文章博士、及儒士二三人、省共判定云云、然則匡衡爲省輔、兼文章博士、於評定場、尤爲要須之人、而諸儒不用匡衡所陳、任情成捴落判、論之政道事甚非常、存式之旨、何有濫吹、

一以學生大江時棟所獻詩、大內記紀齊名誤稱有病累、抑留强處落第事、

右件時棟詩、諸人之中、適免病累、仍文章博士道統朝臣、及匡衡示可擇上件詩之由、而擇上之儒齊名稱有下句蜂腰病、確執抑留、夫蜂腰病者、上句可避之由、見文筆式、因之先儒古賢、不避下句蜂腰、近古之名儒、都良香奉試聽古樂詩、以臥爲韻、其詩云、明王尤好古、靜聽時臨座、如此則聽與座用去聲、不爲病累、已以及第、自餘試、用他聲韻、及第詩等、專無忌下句蜂腰、今案齊名所立之詩髓腦、下句蜂腰者、是不可避之病也、然則時棟詩、已免瑕瑾、吹毛之求、還爲文道之蠹害、加以此度試題、韻以八字、已同賦體、奇法過差之試也、往古未聞八字之例、祈以萬年、已褒帝德、成王周公之事也、當今宜獻萬年之壽、如此則捴落之判有忌諱、諸儒所爲無是非、咸池不齊度於蛙咬、而衆聽者或疑、能不惑者、其唯子野乎、雖云萬乘之尊、難奪疋夫之志、何況諸儒之間、緣底廢匡衡之言、抑先例或及第判、或捴落判、一定之後、若學生所愁、有理之時、改諸儒之所定、有勅召其詩、列及第者、不可勝計、延喜則藤原有述、同連純、和氣兼濟、天曆則藤原篤茂、大江昌言等是也、何況匡衡苟爲儒者、所訴之事、盍仰天選、儒有內舉不避親、外舉不避仇、唯以進才爲業、何以埋才爲計、不爲私而言、爲公訴之、

齊名ノ陳狀　時棟ノ詩ノ病累

以前條事、言上如件、望請天裁、早召問諸儒、涇渭試判之事、匡衡誠惶誠恐謹言、

長德三年七月廿日　正五位下行式部少輔兼東宮學士文章博士越前權守大江朝臣匡衡

從五位下行大內記兼越中權守紀朝臣齊名解申進文事、

辨申文章博士大江朝臣匡衡愁申學生同時棟省試所獻詩病累瑕瑾狀、

一病累、

件詩云、寰中唯守禮、海外都無怨、

今案、外與怨同去聲、是蜂腰病也、詩髓腦云、蜂腰者、每句第二字與第五字同聲是也、如古詩云、○云、朝野群載曰、作ル、聞君愛我甘、竊獨自彫飾、君與甘同平聲、獨與飾同入聲是也、元兢曰、君與甘非爲病、獨與飾是病、所以然者、如第二字與第五字、同上去入皆是病、平聲非爲病也、此病者、○者、朝野群載ナシ、輕於上尾鶴膝、均於平頭、重於四病、文章儀式云、蜂腰每句第二字與第五字同音也、不得然者、件時棟詩、已犯此病、

因茲評定之場、不能選上、爰匡衡陳云、蜂腰上句可避之、下句不可避之、髓腦云、此病均於平頭、平頭近年以來、不避之病也、然則准之平頭、不可避者、齊名答曰、八病之中、必可避者、平頭、上尾、鶴膝、蜂腰等四病也、犯平頭者、或優之、或不優之、上尾、鶴膝、蜂腰必避之、就中髓腦置每句之文、所爲證詩、下句以獨與飾爲病、何更以均於平頭之文、背試場之恒例、○例ノ下、朝野群載理字アリ、謂不可避矣、匡衡陳云、文筆式無每句之文、又聽古樂試詩、都良香犯此病及第、依此等例、不可避者、齊名答云、文筆式無每句之文、則省略也、詩髓腦有每句之文、則觀縷也、文筆式誠雖省略、下句不可避之由、亦不見、若依無每句之文、只避第二字與第五字者、發句上句之外、不可避歟、加之髓腦文章儀式等、其意一同也、至于良香及第者、若○若、朝野群載ナシ、優名士歟、何以本朝隨時之議、猥背唐家不易之文、披陳之旨、其理不明者、

一瑕瑾、

同詩云、浴來人盡樂、霑得世皆喜、似玉潤門千、如毛加戶萬、

今案、上章霑字、霑德之義也、下章潤字、亦潤德之義也、霑與潤其義一也、二句用之、未窺作者之域者也、

詩ノ瑕瑾

又云、菫莆自生厨、鳳凰頻一○頻、朝野群載ニ作ル、集界、

今案、此題詩、美周成王之文也、成王時無菫莆生厨之瑞、而不敍周日之事、空表堯年之祥、求之文章、尤爲乖違、

又云、澤猶覃草木、信幾及鱗介、日下識葵傾、風前看草靡、

今案、上章云草木、下章云草靡、草字兩處、草義一同、著作之趣、可爲巨害、

又云、功名嘲傅說、巧思拉般爾、

今案、傅說者一人、般爾者魯般王爾二人名、而幷二人對一人、況乎般爾之事、非帝德之事、

又云、舜海浪聲空、堯山雲色靜、

今案、此章徒褒堯舜之德、不述成王之美、時代相違、詞義既戾、就中浪聲空三字、甚迂誕也、若是海水不揚波之意與、○與、朝野群載歟ニ作ル、波與浪其意不同、可謂大訛、

又云、絳闕仰清景、

今案、清景者何景哉、帝德之意、其義不見、文之荒凉、不知意趣、

右大外記中原朝臣致時仰云、左大臣宣、奉勅、文章博士大江朝臣匡衡奏狀偁、

學生大江○大江、朝野群載同ニ作ル、時棟奉試詩、適免病累瑕瑾、大內記齊名抑留不選上、諸儒僉議、已爲摠落、召問齊名、可令辨申者、仵時棟詩、病累瑕瑾共以○以、群載似ニ朝野作ル、不免、評定之日、具陳此旨、夫以擧直事君者、臣之節、○節ノ下、朝野群載也字アリ、掄材薦士者、儒之行也、匡衡非華他、而强愈○愈、朝野群載一本念ニ作ル、巨病、○病ノ下、朝野群載漫字アリ、吐莠言而獨負群議、不實之擧、誰謂忠鯁、今承綸言、指陳大略、謹解、

匡衡重ネテ齊名ヲ反駁シ時棟ヲ辯護ス

長德三年八月十五日　從五位下行大內記兼越中權守紀朝臣齊名○朝野群載同ジ、

請重蒙天裁辨定大內記紀齊名稱有病累瑕瑾、所難學生大江時棟奉試詩狀、

一蜂腰難、

寰中唯守禮、海外都無怨、

齊名難云、外與怨同去聲、是蜂腰病也、詩髓腦云、蜂腰者、每句第二字與第五字同聲是也、古詩曰、聞君愛我甘、竊獨自彫飾、君與甘平聲、獨與飾同入聲、元兢曰、君與甘非爲病、獨與飾是病、所以然者、如第二字與第五字同上去入、皆是病、平聲非爲病也、此病輕於上尾、鶴膝、均於平頭、重於四病、又文章儀式云、蜂腰每句第二字與第五字同音也、不得然者、

蜂腰ノ難

今案、所難之旨、甚非常也、何者、案髓腦、八病之中、以四病爲可避之、所謂平頭、上尾、鶴膝、蜂腰也、此四病之中、平頭、蜂腰斟酌避之所以然者、平頭有二等之病、上句第二字與下句第二字同聲者、巨病也、必避之、上句第一字下(脫カ)句第一字同上去入者、雖立爲病之文、不避之、蜂腰有每句之文、上句第二字與第五字同聲、必避之、下句第二字與第五字同聲者、雖立每句之文、不避之是所謂均平頭之義也、由此觀之、髓腦之意、蜂腰者、上句第二字與第五字可避之也、而齊名不述均於平頭之義、强陳下句可避蜂腰之旨、若上句共(下句脫カ)避蜂腰病者、此病可謂重於上尾、鶴膝、不可謂輕於上尾、鶴膝、可謂甚於平頭、不可謂均平頭、若依齊名之新說、下句猶避蜂腰者、彼輕於上尾、鶴膝、均平頭之文、此時可削棄之、抑至于文章儀式每句之文、一同髓腦、不可遑載、文筆式云、蜂腰者、第二字與第五字同聲也、所爲證詩、以上句第二字與第五字同聲、爲病云云、又詩格所釋、初句第二字、不得與第五字同聲、又是劇病云云、然則依下句不可避蜂腰、文筆式、詩格、下句已不載蜂腰之有無、而齊名迷髓腦之理、則失均平頭之義、破後(衍カ)格式之文、亦任口陳省略之由、今就此難、下句避蜂腰者、格式及古今避來病之外、新可加病歟、夫都

良香者、文章之規模、詩人之夔龍也、而齊名申云、至于良香及第者、優名士歟云云、以荒凉之空語、塵先儒之明文、若謂優名士者、作佗聲韻試詩、下句不避蜂腰、預及第之輩、皆是名士歟、皆是優歟、所言不明、無可准的、自古以來、省試詩題、以佗聲字爲韻、尤希有也、適用他聲韻之時、下句不避蜂腰、皆預及第、是不爲難之故也、其詩云、

連理樹詩、以德化先被荒垂爲韻、依次用之、百廿字成之、題者、大輔南淵年名、有名王及第詩、

初知標帝道、　始覺呈皇德、覺與德同入聲、

坂上斯文及第詩、題同、

覆壽專布德、　逐育正施德、育與德同入聲、

聽古樂詩、以臥爲韻、百二十字成之、題者、少輔大江音人、都良香及第詩、第八句云、

明王尤好古、　靜聽時臨座、聽與座同去聲、

藤原淵名及第詩、第五七句云、

三成奏轉切、　肆夏歌何惰、夏與惰同去聲、

文聲方亮發、　韻氣寧殘破、氣與破同去聲、

高階令範及第詩、第四句云、

郊天功始洽、　陳廟德終播、廟與播同去聲、

龍圖授義詩、以德爲韻、限八十字、題者、贈太政大臣、天神、橘公廉及第詩、第八句云、

至哉先聖道、　斟酌方淵塞、酌與塞同入聲、

多治敏範及第詩、第一句第三句云、

三皇誰在首、　穆穆宓羲德、德與穆同入聲、

垂衣施化遠、　刻木出震直、木與直同入聲、

件詩等、就中龍圖授義詩之題者、菅家先祖贈太政大臣、預判文章博士橘廣相卿、聽古樂詩之題者、則江家先祖音人卿、預判文章博士菅原是善卿、皆是東西曹司之祖宗、試場評定之龜鏡也、以儇才奥學之妙簡、明明秩秩之公心、所定置也、而齊名偏執、忝破先賢之旨、諸儒同心、不信匡衡之言、白日之明無私、只仰天判、朱雲之忠難變、不能地忍、又齊名爲損均於平頭之義、陳以平頭或優之或不優之旨、髓腦立平頭之處、上句第一字與下句第一字同聲者、是病也云云、然而古今不避之、近則平露生庭詩題、田口有信及第詩云、四方誇雅正、萬姓感居多、四與萬同去聲、然則有信已不避之、是又優名士歟、所陳之旨、左之右之無謂、

一瑕瑾難、

浴來人盡樂、　霑得世皆喜、　似玉潤門千、　如毛加戶萬、

齊名難云、上章霑字、霑德之義也、下章潤字、亦潤德之義也、霑與潤其義一也、二句用之、未窺作者之域者也、

今案、所難之旨、甚無理致、何者、論語曰、東里子產潤色、顧野王案、潤飾也、又麻果切韻曰、潤益也、然則飾門千、益門千之訓、何難之有矣、又縱使以潤字、雖讀霑訓、古今省試詩、以字異訓同之字、並句用之、是例也、

日月光華詩、限百廿字、

藤原正時及第詩云、

夜魄清無損、　朝曦靜不群、　扶桑晨上旭、　芳桂霽飛薰、朝與晨其義一也、

海水不揚波詩、限八十字、

藤原長頴及第詩云、

滄海無波白、　初知遇太平、　金宮奔浪靜、　玉闕亂濤晴、波浪濤三字、其義一也、非只兩字、已用三字、

文室尙相及第詩云、

棹歌音自亮、　舟宿夢長成、　霽雪好無彩、　臘雷寧有聲、音與聲是也、

蓬莆自生厨、　鳳凰頻集界、

同難云、此題詩、美周成王之文也、成王時無蓬莆生厨之瑞、而不敍周日之事、空表堯年之祥、求之文章、尤爲乖違、

今案、所難之旨、甚以軟弱、何者、此度試、以既飽以德爲題、以君子萬年、介爾景福爲韻、褒當今之德、取喩之詞也、春秋潛潭巴曰、君臣和得道、度叶中、則蓬莆孳於庖厨、孝經援神契曰、天子形乎四海、德洞淪冥、蓬莆生、白虎通曰、孝道至則蓬莆生云云、然則何獨稱唐堯之時、又虞舜之時有之、爰唯是聖代所生之樹也、當今是聖代也、蓬莆何不生厨乎、

仁猶覃草木、　信幾及鱗介、　日下識葵傾、　風前看草靡、

同難云、上章云草木、下章云草靡、草字兩處、草義一同也、著作之趣、可爲巨害、

今案、先例及第詩、並句用同字、專不爲難、

涇渭殊流詩、七言六韻、

大和宗雄及第詩云、

二流涇渭最靈奇、　合注交通不是隨、　共度二宮威浩蕩、　同經三百色參差、二流與二宮並用之、是也、

島田惟上及第詩云、

涇渭分流不雜移、　濁清誠識自然爲、　洋洋既出朝那縣、　浩浩能流烏鼠垂、（分流興能流是也、）

連理樹詩、（限百廿字、）

有名王及第詩云、

靡隔布深仁、　無私施景化、　神工誠不隱、　天道斯無詐、（無私興無詐是也、）

山水有清音詩、（限八十字、）

源當方及第詩云、

四時懷不變、　五夜感相侵、　灑灑何時息、　蕭蕭幾處沈、（四時興何時是也、）

件詩等、或六韻、或八韻、或十二韻、並句用同字、皆預及第、何況此度詩十六韻、百六十字之內、用同字、何難之有矣、

功名嘲傳說、　巧思拉般爾、

同難云、傳說者一人、般爾者魯般王爾二人名、而幷二人對一人者、

今案、所難之旨、甚無謂矣、何者、白居易詩云、幸逢堯舜無爲日、得作羲皇向上人、（是四韻之第二句也、）堯舜者二帝名也、羲皇者一帝名也、以一人名對二人名、先賢之跡也、幷以兩事對一事、是作者之常也、

又難云、般爾之事、非帝德之意云云。

今案、天下無爲、俗阜民淳之時、衆才群藝、各得其所、夫明王不嫌片善、不棄小藝、然則巧匠者在朝、豈是非帝德之廣及、所難之旨、異體也、

舜海浪聲空、　堯山雲色靜、

同難云、此章徒褒堯舜之德、不述成王之美、時代相違、詞義既戾、

今案、此難同於蓋莆之難、製作之旨、專無失誤、何者、自古已來、以堯舜之事、稱帝王之德、是作者之常也、而如齊名之難者、美帝德之詩、永不可稱堯舜歟、難以不可難之事、是未知例致者也、

又難云、浪聲空甚迂誕也、若是海水不揚波之意歟、波與浪其意不同、可謂大訛、

今案、此難大訛、何者、海水不揚波、及第者七人也、其六人皆用浪字、專不爲難、

藤原忠村詩云、

欲知賢聖代、　無浪海中平、

吉野茂樹詩云、

唯望榮光色、誰聞怒浪聲、

藤原蔭基詩云、

卷錦波終滅、飜花浪不輕、

同長顯詩云、

金宮奔浪靜、玉闕亂濤晴、

直鞆王詩云、

浪收漁釣逸、雲齊蜃樓傾、

文屋尙相詩云、

浪花春豈發、潭月夜尤淸、

件詩等併用浪、而今所難還亦大訛也、又張楚金翰苑海部云、接玉繩以暢濤、盪瑤光而吐浪云云、又徐堅初學記海部曰、唐太宗文皇帝、春日望海詩云、拂潮雲卷色、穿浪日舒光云云、又晉潘岳、滄海賦曰、察波浪之來往云云、又晉孫綽、望海賦曰、長鯨嶽立以裁浪云云、此外諸部類書海部、莫不置浪字、是齊名偏守一隅、未涉九流之失也、

絳闕仰淸景、

齊名平頭病幷ニ蜂腰病ノ例ヲ勘申ス

同難云、淸景者、何景哉、帝德之意、其義不見、文之荒凉、不知意趣者、

今案、以君明喻日月、皇明燭照、然則普天之下、何不仰其淸景、又文選東都賦曰、皇城之內、宮室光明云云、然則向絳闕、仰淸景、又何難之有、强致吹毛之求、巧廻銷骨之計、心只有仇、事則無理、

右件詩、齊名所難、甚無所據、今依宣旨、進申文如件、望請殊蒙天裁、任理致辨定、

匡衡誠惶誠恐謹言、

長德三年八月廿九日

正五位下行式部權少輔兼東宮學士文章博士越前權守大江朝臣匡衡解申進申文

依宣旨、言上犯平頭及第不及第、幷犯蜂腰落第例等狀、

右大內記中原朝臣致時仰云、左大臣宣、奉勅、學生大江時棟省試詩、依犯蜂腰、諸儒相共處不第、然則犯件病落第、幷平頭病例、可勘申者、謹檢案內、世有龍門集、是撰集古今省試詩之書也、件書載及第文、不載落第文、仍犯蜂腰病落第例、不能勘申、又平頭病、依詩髓腦案之、不可優之、但見本朝省試詩、多關及第、是優恕歟、至于蜂腰者、其重與鶴膝不異、縱雖及第、何爲恒規、非敢鬪智於英儒、只爲

竭忠於聖主也、是以評定之日、爲公爲道、討論大略、諸儒相共、處之不第、方今絲綸不及諸儒、沙汰獨在小臣、猶又立松節於繁霜、守葵心於聖日也、區區之心、迷于岐路、聊述愚管、伏待天裁、謹解、

年月日　　從五位下行大內記兼越前權守紀朝臣齊名解申進申文

○齊名、匡衡、大江時棟ノ試詩ニツキ、病累、瑕瑾ノ有無ヲ議論スルコト及ビ齊名、平頭病幷ニ蜂腰病ノ例ヲ勘申スルコト、便宜合敍ス、

東三條院ノ奏聞ニ依ル

十八日、庚辰、檢非違使ヲ補ス、

〔權記〕七月十八日、右衞門少尉藤原陳泰、爲檢非違使之宣旨下、東三條院（詮子）被奏云々、

八省院行幸

十九日、辛巳、臨時祈年穀奉幣、

〔日本紀略〕一條院　七月十九日、辛巳、祈年穀奉幣、天皇行幸八省院、

奉幣使定

〔權記〕七月十七日、己卯、○中略、昨日左大臣（道長）被定申臨時奉幣使事、來十九日云云、行事卽右少辨（朝經）云々、

伊勢石清水賀茂松尾春日平

十九日、辛巳、今日八省行幸也、早朝與右兵衞權佐時方同車、參左相府（道長）、○中略、文章生試判ノコトニカヽル、本月十七日ノ條ニ收ム、丞相參內給、未一刻左大臣奏、○此間闕文アリ、伊勢、八幡、賀茂、松尾、春日、平野□（等カ）仰云、○此間闕文アリ、召大內記齊（紀）名朝臣、仰此由、題之、令藏人少納言道（惟）方奏請書、次出御南殿、行幸八省、今日左右（公季道綱）大將不參、事了、還御（行事左大臣、右少辨、行事源進士）之後退出、未御八省以前、於腋陣下、右少辨（朝經）云、伊勢幣料已可闕怠報之、率分下文近江、駿河等國各三疋成了、何國未進乎、此間近江介則忠又參會云、使部等昨夕持來率分下文、綾三疋絹三疋之中、絹令進了、至于綾者、忽無其儲者、須猶可進由、可示也、然○此間闕文アリ、○此間闕文アリ、勤仕之國、忽申無術之由、於事可○此間闕文アリ、少辨、令遣召行事、官掌尙貞仰云、去春越前國所進率分之後、雖奏解文、未納正藏、汝知彼國事云々、其辨如何、尙貞申云、去春國司所上送綾五疋、未申收間、依有宣旨、□御齋會講師裝束料幷臨時幣料了者、又仰云、至于裝束料者、奉仕彼會行事之時、其宣旨無下、所申不當、又駿河國可奉綾、已有其數、尙貞又知其國事云々、早可令辨進、行幸刻限已至、近江國所申、雖不可然、依在前々勤事之國、不○此間闕文アリ、行事辨、又赴八省、

伊勢幣料

近江駿河等ノ率分下文

越前ノ率分下文

重日ノ奉幣

二十一社

〔左經記〕長元五年五月四日、甲戌、○略、○中略、

抑重日被立祈雨奉幣使之例、不少、○略、○中略、長德三年七月十九日、辛巳、有八省行幸、廿一社被奉祈年穀幣使、○略、○下略、

竟
事定
僧二十一口
大般若不斷御讀經
行香

二十一日、癸未、清涼殿ニ於テ、臨時御讀經ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　七月廿一日、癸未、於清涼殿御讀經五(廿一カ)口、
廿二日、甲申、同竟、

〔權記〕七月十七日、己卯、昨今有所勞不出仕、早朝藤進士、以書傳左丞(道長)相命云、今日於御所、可被定臨時御讀經事、所煩若宜者、可參入之趣也、然而令申未減平之由、不參入、晩景右少辨朝經過訪之次、示曰、今日被行雜事、右丞(顯光)相就陣給、有申文、左大辨(權)、文少(大カ)史、次藏人辨(藤原)爲任奉勅仰大臣、令定申臨時御讀經僧名、左大辨執筆、廿一日不斷云々、來廿一日云々、
廿一日、未、一刻參內、臨時御讀經發願、行事右大臣、藏人辨、行事廣業、申刻槌鐘、衆僧參上、廿一口、大般若不斷、
廿六日、戊子、今日臨時御讀經結願也、○中略、道長病ノコトニカヽル、本月二十六日ノ條ニ收ム、參內、右大臣、式部大輔、輔正、左衞門督、誠信、左兵衞督、高遠、右兵衞督、公任、右大辨、忠輔、宰相中將、齊信、等、被作行香、頭中將立加也、

二十六日、戊子、左大臣道長病ム、是日、道長、雜事ヲ定ム、

〔權記〕七月廿六日、戊子、○中略、臨時御讀經ノコトニカヽル、本月二十一日ノ條ニ收ム、詣內(公季)相府、先日所被奏越前國申劍宮(○此間闕文アリ、)榮爵文宣旨下、令勘傍例、昨大外記致時(中原)(○此間闕文アリ、)文到來、先可聞案內之由、前日有命、仍爲申其由也、次詣左相府(道長)、閉西門、御物忌云々、途中御隨身持逢權中將書狀、披見、大殿御心地甚不覺也者、卽招出中將、相逢問案內、卽曰、從院出給之間、初如瘧病、煩給之事甚重、今間暫休息給者、仍爲行雜事、先參內、中途逢甚雨、○中略、顯光以下臨時御讀經結願行香ノコトニカヽル、本月二十一日ノ條ニ收ム、事了、□參左府、民部大輔傳御(○此間闕文アリ、)事、今朝所發動給御病(○此間闕文アリ、)於申雖無便宜、事已非常、依國司催送、申武藏國申平眞行犯仗文事、被命云、早可奏云々、又被示雜事、示內藏頭(陳政)、山階、春日、木幡等可致(被カ)奉御祈使事、入夜詣東院、奉謁入道(義懷)中納言、下奉親宿禰宣旨、注目錄、

越前劍宮榮爵文ノコト
道長物忌
瘧病ノ如シ
武藏申請ノ平眞行ノコトヲ
奏ス
御祈使ヲ派遣セシム

三十日、壬辰、相撲召合、

〔日本紀略〕一條院　七月卅日、壬辰、相撲召合也、去廿七日、被仰下云、依女院(詮子)御惱事、停音樂、
八月一日、癸巳、相撲拔出、

〔小右記〕七月廿八日、庚寅、右衞門府生保年申云、昨被下相撲樂止宣旨云々、若緣左府(道長)病歟、今夏飢餓無極、于今不止、不可有樂之年也、左府之所定奏、天下

東三條院ノ御惱ニ依リテ音樂ヲ停ム
拔出

藤原齊信里第ニ於テ相撲ヲ行フ

先蹤ナシ

所奇、今以自故被停止、天之所爲歟、

八月十一日、癸卯、左近將曹滋明云、朔五日、宰相(齊信)中將召官人、立合相撲長相撲人等、給饗令布成(曳カ)、又令相撲、二番、驚可(奇カ)無極、布曳等事、大將還饗之外、無此事、若不知先跡歟、將軍可被咎事也、又云、大將召合以前、於里第定相撲、不異右將軍而已、

〔權記〕七月十七日、己卯、○中略、臨時御讀經ノコトニカル、本月二十一日ノ條ニ收ム、又有相撲召仰之事、

内取

卅日、○此間闕文アリ、樂□、又藏人辨傳仰右丞相也、依大○此間闕文アリ、御物忌、延日可被行也、先例依某□□□行之由被仰、而今日不被仰云々、傳勅之人忘誤歟、

廿七日、己丑、今日相撲内取、先詣左府、召入於簾内、被示云、相撲内取、明日可被行由、豫所□□、依有所勞、不可參入、明後兩日御物忌也、今朝參○此間闕文アリ、所惱重由、今日内取不定也者、抑所勞未平復、然而減自作(昨)日、御物忌間、御覽内取之事、雖有例、今日御覽有何事乎、以有所勞、被延今日、更明日御物忌、强召□事、不可然歟、早參入奏聞此由、可催行其事者、卽參入奏案内、依仰事催行、午刻主殿屬晴光、率僚下引幔、藏人泰通垂御簾、右相撲人等引入西廊、此間、右近中將實方付擬近衞十三人、奏御畫聞□下給、左大將依可□之遲々、今日事懈怠、申二刻、○此間闕文アリ、□□□(左近也)將正光、奏昇殿慶、去九日被免、以左相撲入南廊、大將依召、參候御前、東廂南第二間用圓座、二條關白同座、此處、相撲了退出、又右大將依召、催如左、件座源中將示云、先年故左大將候簀子敷云々、□余示云、至于公卿者、御座在□□時、可候簀子、至于御簾内之時、可用此處也、中將承諾、事了召御前、仰云、可有樂之由、先日所令仰也、而院御惱猶未平愈、令更發給云々、可止樂之由、可仰右大臣者、卽申右丞相了、

召合紫宸殿ノ裝束

廿日、壬辰、有相撲召合事、巳刻參内、見南殿御裝□(束)、催行雜事、母屋南行御簾内、可○此間闕文アリ、所司誤也、卽召仰令立、仰云、左大臣參否如何、奏云、昨申可參之由、又仰云、六府出居等參否如何、召問外記可申者、卽召大外記致時(中原)於射庭殿問之、申云、右衞門佐二人申障、仍誡仰兵庫頭、聞定參入歟、五府無申障者、卽奏此旨、此間左右大(公宰、道綱)將參入、右兵衞佐時方候御褂、此間示左近將監泰通(通兼)、令申欲出御之由於左府□□、此間右大將被蔭孫(藤原)兼綱名簿、故二條右丞相之三男、爲將軍養兒也、予申(行成)□□左丞相可奏歟、報命云、可然○此間闕文アリ、先例東宮參上時、宮司藏人等候右近陣、而無宣□□、陣官不□參入、扌(マヽ)待宣旨事、有停滯云々、今日東宮(居貞)可被參上、豫召仰陣官奈何、仰云、早可仰、件(依有氣色所奏也)、卽仰源中將、參宮(皇子)啓此旨、此間左丞相被參陣座、召大外記、被問諸衞佐參否、次予申有待令參給可出御之御氣色由、

陸奥兼綱ノ名簿

大臣被示云、日者所勞相扶之間遲參也、又欲候御後、又可出居、左兵衞佐義理參金峯山云々、仍可召能通之由、仰外記了、聞申返事可參上、以此○此間闕文アリ、者、亦□申兼綱名簿事、早可奏者、卽參上、奏左大臣令申旨、又奏右大將、令奏兼綱名簿、仰可聽昇殿、卽下出納允政、依例宣旨書、卽加署、了云藏人少納言、道方、令付兼綱□札、暫左大臣參上、于時出御、掌侍義子親子□□賣神璽寶劍、候前後如例、次參東宮、又左丞相被參、暫之東宮參上給、大夫前行、御座西敷茵、用藏人所、此間□□□親王、被參於南殿北廂、召余被奏云、須候座、而未著陣座、今日休日也、初著陣座、有事□□仰、欲候御後□□奏案內、仰云、依請、卽以仰旨申親王、予先以所菅圓座、敷東宮御座西南柱下、次親王參候、次掌侍親子臨東檻、內大臣依帶大將先參上、此間右大臣被參、予告申、今日可召侍從由、暫泰通告右大臣召、卽參陣壁後、被示者、可召侍從、卽參上候氣色、卽依仰々大臣、々々著陣座、召仰大外記、仰此由、次右大臣以下參上、大臣仰可召侍從由於外記之後、又召余、可被仰、若物□□便、又可被仰爲裝束便之故、而無被仰、但雖無仰、預誡大夫史國平朝臣了、次出居次將侍從等參上、後聞者、出居未參上前、大將奏相撲奏云々、有例歟、暫左近將監信眞、取版位、次右大臣依仰□□（饗カ）子敷、次出居著床子、次左右相撲長等、取員刺幷出衣座敷之次、□合出員刺事等如例、穀倉院賜王卿以下饌、內豎□□送

兼綱ニ昇殿ヲ聽ス

出御

東宮參上シ給フ

穀倉院ノ饗饌

勅判

東宮ノ饌

還御

御覽

出御

內藏寮、差殿上人饌、

一番右勝、有勅判持、二番間、賜張席於出居座、三番供御膳、（右兵衞督憲定、御座西立置物机二脚、其上立御臺二本、）也、年來不立此机云々、誤也、藏人辨云、警蹕如何、予答可有之由、辨諾、次內藏頭陳政朝臣供差東宮饌、高坏六本、御厨子所、辨備、先年用銜重云、先々失也、但不被聽宮殿上之者、不益、次賜彈正尹○此間闕文アリ、大臣、々々候座□藏人所□、圓座□、五番之間、所司撤殿張帶、左右□□綱、持□寮參返撤也、又撤出居前張莚、共如例、十番主殿寮擧燭、自日月兩華門入、列殿庭北面、暫十一番出間立南北行、東面、西十七番了還御、

一番左國景、右勝岡、勝、勅判持、二番、左安倍久光、右紀豐信、三番左厚常、右紀時任、勝、四番左安曇宗平、右紀時正、勝、五番左是信、勝、右三宅元弘、六番左利信、勝、右行時、七番左宗光、右逆光、勝、八番左武信、勝、右兼時、九番左員木、右神時正、勝、勅持、十番、左滋茂、右高利、勝、十一番左滋種、右高利、勝、十二番左高利、右宗近、勝、十三番左美乃白丁、右公近、（勝）十四番左近江男、右正勝、々、勅持、十五番左宮部茂國、右林助高、勝、十六番左常時、勝、右常正、十七番左□□（越）右智常世、

左勝七、右勝六、持三、但持皆右勝也、不決一、最手也、

八月一日、癸巳、有御覽事、巳二點參結政、無史官掌、仍不就、參入內、所司裝束如昨、但諸衞出居座不立、申一點出御、義子親子等候如昨、暫東宮參上、彈正親王同參上、次親子臨東檻、次內大臣參上、兼大將也、次右大臣以下參上、義子寄東御屏風南頭、召右大臣、々々進候御簾下、如昨、次左右相撲長各一人、取圓座敷、安福春興殿廂

北第一間也、幕外、左少將重家、右權中將經房等、自當座幕下出居、昨右近出居少將周頼、有所勞不參、權少將兼隆不役、方理不參、次左相撲人列立御前、北面西上、上卿仰令西向、次令南向、次退入、仰詞不聞、右列立、東上、次第准可知、次拔出一番、左和爾部久光、右最手越智常世手合之間、少角力久光不可敵、然而常世突膝退入、此間賜王卿以下饌、如昨、二番左利近、右勝國勝、三番左維延、又有仰召之手合、申辭退、右凡時正勝、四番左厚常、右逆光勝、五番左武信、右神時正勝、第三番之間近江介則忠朝臣陪膳、民部權大輔成信朝臣供東宮饌、春宮大進賴光賜彈正親王饌、此間追相撲、白丁陣直如例、追相撲間、所司秉燭、事了還御、五番間賜苽、近衛次將、只左少將明經朝臣、相經等二人也、內藏寮衝重、遲持參、仍懈怠也、還御之後衝重、昨燭等事、甚懈怠之由、責行事藏人、左近將監泰通也、行事人稱內藏寮懈怠由、召少屬錦時延、令候客座、今夜宿侍、

拔出
饌饌
追相撲
還御
內藏寮ノ懈怠
違期ノ相撲盛利ヲ投獄ス
病ニ依リテ假ヲ給ス

〔權記〕八月廿八日、右〔道綱〕大將令奏云、出雲國相撲近衛出雲盛利、偏成遁避、期日以前不參、仍仰國司、令召進也、違期參上之輩、計其日、可令候獄所之由、已有宣旨、可被召仰使檢違官使、依請、

九月五日、右大將奏云、去月廿八日令奏事由、令候獄所出雲國相撲盛利、日者有可煩云々、違期遲參、尤可懲誡、但受病於獄中、已及死門者、暫免給身假、令加療治、今日御物忌、已以陣外、仍令左衞門尉藏人則光、傳奏、仰云、依請、卽仰大將、又仰則光了、

〔樗囊抄〕年中行事　相撲　卅日例　長德三、止樂　同三、依女院御惱、

○藤原齊信、里第ニ於テ相撲ヲ行フコト、便宜合敍ス、

内論議

紫宸殿裝束

大學寮胙ヲ獻ズ

出御

博士等參入

八月大 癸巳朔盡

五日、丁酉、釋奠、

〔日本紀略〕一條院 八月六日、戊戌、今日釋奠內論義也、可出御南殿之由、昨奉左大臣(道長)宣、仰左大史國平(多米)朝臣、又仰藏人廣業、令行懸御簾、催內侍等事、辰刻所司裝束南殿、其儀同不出御節會、但御簾內御帳、東間逼南、立大床子二脚、以爲御座、殊以御圓座置床上、南廂東一二三間、立兀子床子、大臣兀子以錦爲褥、參議以床子爲座、爲大臣以下座、西上北面、第四間立床子一脚、爲說者座、北面藏人頂、仰召校書殿如意令掃部寮置之、床子上置西、可在人左也、其後簀子敷立床子一脚、爲問者座、當公卿座後簀子敷立床子、爲博士已下座、東廂南第一間、立床子二脚、爲出居座、巳刻大學寮獻胙、未二刻明經道就藏人所、奉博士以下見參、一通奉外記云々、此間右兵衞權佐時方供御裝束、同三刻、左近將曹粟百行來、告左大臣召由、于時候殿上也、卽參向、命云、明經博士等參入之由、可奏參、被奏此由、卽出御、所司供如例、內侍二人候寶劍等、如例、供奉女房三人、此間諸卿於壁後著靴、御出之由、申左大臣、々々被問云、雨儀如何、申云、雨儀之時、應召參入、內豎立軒廊、西面、又博士等參入、立宜陽殿西廂參上、自餘晴雨之儀、無所分別、次掌侍臨東檻、

問者生參入

還御

次左大臣(道長)、右大臣(顯光)、源大納言(時中)、右大將、道、左衞門督、誠、左大辨、扶、右大辨、忠、宰相中將、齊、參上、次左近少將明理朝臣著靴、自日華門參入、著出居座、左大臣喚內豎、二音、內豎等於日華門外、同音稱唯、別當兵庫允紀有隣參入、立殿東南壇下、大臣宣、博士等召セ、有隣稱唯退出、次博士致明、助教爲忠、直講淑光、已上五位、問者生中原德如、橘良家、中原貞清參入、列立殿東南壇下、大臣因博士以下參上、就公卿座後床子、大臣召致明、々々跪床子前、稱唯、西進當問者床子前、申官位姓名、即再拜、於床子東頭可拜也、上長押上膝行、挿笏取如意、更起摩靴傍行、就說者床□、自東頭、經西大臣座就也、又大臣召爲忠、又跪座前稱唯、西進當問□(者力)床子前、申官位姓名、再拜就床子、次致明斷章云、毛詩、爲忠發問論難義、訖爲忠還本座、次致明傍行還、就床子後、跪置如意於床子上、拔笏右廻、還著本座、次大臣又召爲忠、々々跪於床子前、稱唯、到說者床子後搢笏膝行、取如意傍行、就說者床子、次大臣召淑光、々々跪床子前、稱唯西進、於問者床子□□、稱官位姓名、再拜就其床子、發問論義、此間爲忠笏落自腰、在床子下、淑光退後、致明召問者生德如、德如跪、幷職位姓名等同前、次第如前退、次爲忠起座、傍行跪於床子□□置如意、取笏還本座、次致明以下退下、此間還御、公卿出居、又退下、藏人廣業率出納卜部爲親、於敷政門內、遣陣官等賜

雨儀

祿於博士以下、如例、用雨儀、

八日、庚子、東三條院、石山寺ニ詣デ給フ、

〔日本紀略〕一條院　八月八日、庚子、東三條院（詮子）參石山給、

十日、壬寅、定考、

〔日本紀略〕一條院　八月十日、壬寅、定考、

滿宣ノ宅ニ到リ雜物ヲ取ル

十四日、丙午、權左中辨高階信順ノ從者濫行ヲナス、

〔小右記〕八月十四日、丙午、權左中辨（高階信順）來門外、以國乾朝臣、通滿宣宅事、兩三度報答、件辨從者、到滿宣宅、成濫行被取雜物、令下召名、爲觸其事等所來也、

檢非違使ヲシテ問注セシムル守信ノ造意ニ依ル

十五日、丁未、石清水放生會、是日、看督長ト、東三條院ノ御誦經使大炊允宇治守信ノ從者ト鬪亂ス、

〔權記〕八月廿八日、○略　右衞門（藤原滋信）督令奏云、去十五日、石清水宮放生會、依例隨彼宮（鶴岡寺）寺申所、差遣看督長愁申、依慮外事、與東三條（詮子）院御誦經使大炊允宇治守信從者、相共鬪亂之間、被打損頭之由、仍遣檢非違使、於事發所、令問注之處、守信爲造意首成此事者、守信身已六位已下者、須任法召其身決其罪、然而稱院御誦經使、非經奏聞、可難進止、隨仰將行、

爲成ノ懈怠

冊日、奏聞、仰云、守信爲造意首之由、有證署者乎、以日記可奏、

十九日、辛亥、陣定、是日、祭主大中臣永賴ニ御祈ヲ奉仕セシメ、外記宗岳爲成及ビ同林相門ニ怠狀ヲ上ラシム、

相門ノ懈怠

〔權記〕八月十九日、平（惟仲）中納言令奏云、依去十六日仰、彼日及申刻、上卿不參由、不令奏案內之旨、令問外記爲成、申云、彼日及未三點上卿不參、仍欲令奏事由之處、相（林）門申大納言源朝（時中）臣只今可參由、仍相待之間、時刻推移、遂不參入、于時惟仲參入、仍不令奏事由也者、仰云、相門申源朝臣可參之由事、未三刻者、刻限已過、木天爾、稱相待可參、上卿不令奏事由之事、其怠在爲成、又相門同雖祇候、不申其由、然則共有其怠、可令相門爲成進怠狀者、卽仰了、又依勅、召祭主（大中臣）永賴於腋陣下、仰御祈三箇日可奏（卷）仕之由、○中略、攝津守藤原理兼赴任ノ由ヲ奏スルコトニカヽル、七月九日ノ條ニ收ム、今日、左（道長）大臣陣於被定雜事、戌刻奏定文、攝津守理兼朝臣申雜事十三箇條、美濃守（源）憲申請雜事三箇條、伯耆守政職申被免異損田事、幷故大膳大夫時文後家（マヽ）香子申事等也、子細見奏文目錄、

三箇日ノ御祈ヲ奏ス

伯耆ノ異損田

怠狀ヲ免ズ

九月九日、○略　中外記相門爲成怠狀、誠將來免給之由、依勅仰平中納言、○略　下

二十日、壬子、權律師會奪寂ス、（朱書）「紀伊國人」

〔僧綱補任〕三興福寺本　權律師會奪　正暦四年十二月十七日任、眞言宗大安寺、長德三年八月廿日入滅、

官歷

〔僧綱補任〕乾德川昭武氏本　權律師會奪　眞言宗、大安寺、正暦四年十二月十七日任、年、臘、伊勢國人、或紀伊國人、祚惟受法弟子、長德元年濟信在上、同二年今年卒、〇以上六字衍、同三年八月日卒、

二十八日、庚申、京官除目、

〔公卿補任〕七寛仁三年　參議、位資平上正四位下藤經通　長德三八廿八侍從、

惠子女王給

〔除目大成抄〕一未給　春外國一惠子女王寛和元年給、准后　長德三秋　大和權少掾正六位上源朝臣增

皇后宮御給名替

〔除目大成抄〕二任符返上　春外國二名替　長德三秋　紀伊大目正六位上大中臣朝臣永正皇后宮長德元年御給紀利廉返上任符替、〇魚魯愚抄

同ジ、

備前掾正六位上大藏朝臣公時尙侍綏子正暦五年給石野元兼返上任符替、改任、

尙侍綏子給改任

〔除目大成抄〕二五節　春外國二名替　長德三秋　淡路掾正六位上酒井宿禰吉仲停依獻右大臣去年五節舞姫二合登美博忠、改任、

〔除目大成抄〕四料　春外國四　長德三秋　筑後權介正六位上眞髮部宿禰守忠海印寺作料、

海印寺作料

〔除目大成抄〕七諸司奏　春京官二　長德三秋　木工少屬從七位上上毛野朝臣直行內匠寮奏、

內匠寮奏

〔除目大成抄〕八所々藏人　春京官三　長德三秋　縫殿少屬正六位上私宿禰致信本宮藏人、僚職、但藏人有妻、可尋無、

本宮藏人

〔日本紀略〕一院　八月廿七日、己未、京官除目、廿八日、庚申、同終、

寛

〔權記〕八月廿五日、〇中略來廿七日、可被行京官除目之由、左大臣（道長）被仰下、卽仰物部大史邦忠、又仰左近將監、泰通、廿八日、〇中略依勅修理權亮源方弘、如舊可爲藏人之由、仰出納允政、

藏人留任

〔小右記目錄〕五京官除目事　同（長德三年）八月廿七日除目議事、

入眼

同廿八日入眼事、

執筆

〔敍位除目執筆抄〕長德三年八月廿七日京官、執筆左大臣（道長）御堂、

長德三年八月二十八日

御前ニテ圓教寺會ノ請僧ヲ定ム

源致明等ノ位祿代ヲ下ス

道長桂芳坊築垣ノ修理ニ付キ奏ス

官歷

令辰ノ弟子

圓教寺會請僧ノコト、桂芳坊修理ノコト等ヲ定ム、

〔權記〕八月廿八日、此日召左大臣(道長)於御前、被定圓教寺會請僧、依召進紙筆等、大臣被奏云、內給豐前介藤原輔藤、々字大間書落、被仰召名、上卿令付、卽依勅趣陣、仰平中納言(惟仲)、差小舍人調爲善、遣越中守業遠朝臣宅、仰博士致(遵)明朝臣位祿代、可充下之由、是先日、依致明愁申有宣旨、所仰其位祿官符、日者紛失、今日適求出、仍所遣也、此次又同示送比(此カ)朝臣、守隆朝臣、命婦豪子位祿代、同可下行之由、左大臣被奏云、爲義所申請、可修造桂芳坊事、依當御忌方可難犯立(土カ)、先修理所々、明春可奉仕築垣等事、隨仰將進止、仰云、依請、○下略、石清水放生會ノ日ノ條ニ收ム、コトニカヽル、本月十五

是月、權少僧都仁覺寂ス、

〔僧綱補任〕○三興福寺本　權律師(朱書)〔令辰僧都弟子〕仁覺　永延二年十一月三日任、已講勞、大安寺、法相宗、「六十九(朱書)」長德元年十月七日轉任權小僧都、同三年八月日入滅「六(朱書)十八」、

〔僧綱補任〕○乾德川昭武氏本　權律師仁覺　法相宗、大安寺、永祚元年三月四日任、三會勞、年六十八、臘四十四、故令辰少僧都弟子、天元三年講師、長德元年十月七日任權少僧都、長德三年月日卒、

昭和五年十月十七日印刷
昭和五年十月二十日發行

（大日本史料第二編之二奥付）
豫約價金七圓

著作權所有

編纂兼發行者　東京帝國大學

印刷者　三秀舍　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所　東京帝國大學文學部　史料編纂所
電話小石川(85)一七〇二・四〇二二番